

秋田県文化財調査報告書第277集

寄 騎 館 遺 跡

—一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998・3

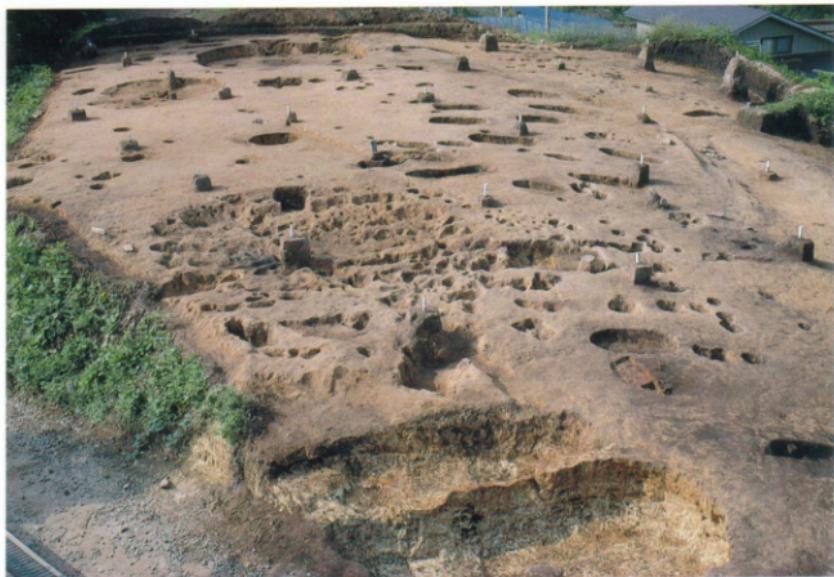
秋田県教育委員会

よ り き だ て い せ き
寄 騎 館 遺 跡

—一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

1 9 9 8 . 3

秋 田 県 教 育 委 員 会



調査区全景（北→南）



調査区中央部の土坑墓群（東→西）



第1号竪穴住居跡(北→南)



第2号A・B竪穴住居跡(北→南)

序

秋田県には先人の残した多くの文化財が残されています。これらの文化遺産は現代に生きる私たちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局湯沢工事事務所により、交通渋滞を緩和するため仙北郡神岡町北樺岡から協和町峰吉川に至る一般国道13号刈和野バイパス改築事業が計画されました。この計画路線内に寄騎館遺跡がかかっていることが、先に実施した分布調査で確認され、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴住居跡や土坑墓、中世の土坑墓などが検出され、大きな成果を上げることができました。

本書はこの成果をまとめたものであります、県民の文化財に対するご理解とともに歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、建設省東北地方建設局湯沢工事事務所、協和町教育委員会ならびに地域住民の皆様、調査にあたりご指導、ご協力下さった多くの方々に対し厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例　　言

1. 本報告書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る寄騎館(よりきだて)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 寄騎館という名称は、「秋田県の中世城館」では本遺跡より南側0.5km離れた地点に図示されている。分布調査の時点で、中世の石造物があることから寄騎館という名称を使用しているが、ここでは混乱を避けるために小字名を使用せず、寄騎館の名称を生かして寄騎館遺跡とした。
3. 本書の執筆・編集は、庄内昭男と高橋忠彦が行い、最終的に高橋忠彦が加筆・校閲した。
4. 本報告書に掲載した2万5千分の1・5万分の1の地形図は、建設省国土地理院発行の地形図を複製したものである。
5. 遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原著『新版 標準土色帖』(1973)を使用した。

凡　　例

本報告書の挿図ならびに図版は、次の要項に従って作成されている。

1. 遺構の記述について

遺構実測図は、構成上不定縮尺である。

遺構実測図の中の方位は、国家座標第X系座標北を示す。

遺構上層図中のaは地山土塊、a'は地山土塊と黒色土塊の混合土、bは植物根や後世の搅乱である。

住居跡・土坑・焼土遺構・土器埋設遺構については現場ではアルファベットと数字を組み合わせて遺構注記番号としたが、本書では遺物の整理を経て、以下のとおり新たなる名称・番号をつけて再編集した。

S101	第1号堅六穴居跡	S102	第2号堅六穴居跡	SK03	第1号方形土坑	SK04	第9号A土坑	SK05	第10号A土坑	SK06	第11号A土坑
SK07	第12号A土坑	SK08	第13号A土坑	SK09	第1号圓状土坑	SK10	第1号B土坑	SK11	第2号B土坑	SK12	第14号A土坑
SK13	第3号B土坑	SK14	第1号C土坑	SK15	第17号A土坑	SK16	第4号B土坑	SK17	第5号B土坑	SK18	第15号A土坑
SK19	第2号C土坑	SK20	第1号A土坑	SK21	第2号A土坑	SK22	第3号A土坑	SK23	第4号A土坑	SK24	第5号A土坑
SK25	第6号A土坑	SK26	第7号A土坑	SK27	第19号A土坑	SK28	第16号A土坑	SK29	第1号焼土遺構	SK31	第18号A土坑
SKP32	第1号柱穴	SK33	第1号火葬墓	SK35	第20号A土坑	SK36	第8号A土坑	SK42	第1号長方形土坑	SR01	第1号土器埋設遺構
SR04	第2号土器埋設遺構	SR05	第3号土器埋設遺構	SR03	第1号大型土坑						

2. 遺物の記述について

本報告書に掲載した遺物は、発掘調査によって得た資料のすべてではない。

実測図は次の縮尺に統一してある。

【土器】土器拓影：1／3

【石器】石錐・石匙・石製品：1／2 磬石器：1／3

写真図版の遺物の縮尺は、不定縮尺である。

3. 遺構・遺物の挿図には下記のスクリーントーンを使用した。

 焼土

 赤色顔料

 地山

 炭化物

 石器の磨面

 石器に付着するアスファルト

目 次

卷頭図版

序	i
例言・凡例	ii
目次・挿図目次・図版目次	iii・iv

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と周辺地形	2
第2節 周辺の遺跡	4

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観	6
第2節 調査の方法	6
第3節 調査日誌	7

第4章 調査の記録

第1節 調査区の地形と層位	11
第2節 検出遺構と出土遺物	11
第3節 遺構外出土遺物	43

第5章 まとめ	53
---------	----

挿 図

目 次

第1図	遺跡周辺の地形分類	2
第2図	遺跡の位置	3
第3図	周辺の遺跡分布	5
第4図	グリッド配置	8
第5図	遺構配置と遺物出土土地点	9~10
第6図	基本層序	11
第7図	第1号竪穴住居跡	13~14
第8図	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	15
第9図	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	16
第10図	第1号竪穴住居跡出土遺物(3)	17
第11図	第2号A・B竪穴住居跡	19
第12図	第2号A・B竪穴住居跡出土遺物(1)	20
第13図	第2号A・B竪穴住居跡出土遺物(2)	21
第14図	第1~4号A土坑	23
第15図	第5~8号A土坑	25
第16図	第9~12号A土坑	27
第17図	第13~16号A土坑	29
第18図	第17~20号A土坑	31
第19図	第18・19号A土坑出土遺物	32
第20図	第1~5号B土坑・第1号C土坑	33
第21図	第1~3号B土坑出土遺物	35
第22図	第1号袋状土坑と出土遺物	35
第23図	第1~3号土器埋設遺構	
	第1号焼上遺構	37
第24図	第1~3号土器埋設遺構出土遺物	38
第25図	第2号C土坑・第1号火葬墓	
	第1号方形土坑	40
第26図	第1号長方形土坑	41
第27図	第1号柱穴・第1号大型土坑	42
第28図	遺構外出土土器(1)	44
第29図	遺構外出土土器(2)	45
第30図	遺構外出土石器(1)	48
第31図	遺構外出土石器(2)	49
第32図	遺構外出土石器(3)	50
第33図	遺構外出土石器(4)	51
第34図	遺構外出土石器(5)・石製品(1)	52
第35図	第1号竪穴住居跡平面区分模式	53

図 版

目 次

図版1	斜面部調査状況(東→西)	
	平坦部の調査状況(南→北)	
図版2	調査後の状況(西→東)	
	調査後の状況(北→南)	
図版3	第1号竪穴住居跡完掘状況(北→南)	
	第1号竪穴住居跡の炉(西→東)	
図版4	第1号竪穴住居跡の炉(南→北)	
	第2号A・B竪穴住居跡(北→南)	
	第2号A・B竪穴住居跡の炉(東→西)	
	第2号A・B竪穴住居跡の炉(北→南)	
図版5	中央土坑群確認状況(東→西)	
	中央土坑群完掘状況(東→西)	
図版6	南側土坑群完掘状況(東→西)	
	第2号A土坑断面(南→北)	
	第13号A土坑断面(南→北)	
図版7	第1号A土坑完掘状況(南→北)	
	第2号A土坑完掘状況(南→北)	
	第3・4号A土坑完掘状況(南→北)	
図版8	第8号A土坑完掘状況(北→南)	
	第10号A土坑完掘状況(南→北)	
	第11号A土坑完掘状況(南→北)	
図版9	第12号A土坑完掘状況(南→北)	
	第13号A土坑完掘状況(南→北)	
	第14号A土坑完掘状況(南→北)	
図版10	第16号A土坑完掘状況(北→南)	
	第17号A土坑完掘状況(南→北)	
	第2号B土坑完掘状況(南→北)	
図版11	第3号B土坑完掘状況(真上)	
	第1号C土坑完掘状況(東→西)	
	第1号袋状土坑完掘状況(西→東)	
図版12	第1号土器埋設遺構(南→北)	
	第2号土器埋設遺構(南→北)	
	第3号土器埋設遺構(南→北)	
図版13	第2号C土坑土層断面(南→北)	
	第2号C土坑完掘状況(南→北)	
	第1号火葬墓(南→北)	
図版14	第1号方形土坑確認状況(北→南)	
	第1号方形土坑完掘状況(北→南)	
	第1号柱穴完掘状況(南→北)	
図版15	第1号大型土坑の調査風景(南→北)	
	第1号大型土坑完掘状況(南→北)	
図版16	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	
	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	
図版17	第2号A・B竪穴住居跡出土遺物(1)	
	第2号A・B竪穴住居跡出土遺物(2)	
図版18	土坑出土遺物	
	第2号A・B竪穴住居跡出土遺物(3)	
	第13号A土坑出土遺物	
図版19	第1号土器埋設遺構出土遺物	
	第2号土器埋設遺構出土遺物	
	遺構外出土土器(1)	
図版20	遺構外出土土器(2)	
	遺構外出土石器(1)	
図版21	遺構外出土石器(2)	
	遺構外出土石器(3)	
図版22	遺構外出土石器(4)	
	遺構外出土石器(5)・石製品	

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至るまで

一般国道13号は、福島市を起点として山形市、新庄市、横手市、大曲市等の主要都市を経て秋田市に至る総延長298kmの主要幹線道路として重要な役割を果たしている。

しかし大曲と秋田の間をつなぐ峰吉川地区において近年交通量の増大と、車両の大型化により交通渋滞が慢性化し、とくに冬期間の交通は困難なものになってきている。

このような問題を解決するために、建設省東北地方建設局湯沢工事事務所より刈和野バイパスの改築が計画されたのは昭和53年であった。その後工事計画は一時凍結の状態であったが、平成7年に計画の実施が決定され、平成8年に事前調査として発掘調査を実施した。

第2節 調査要項

遺跡名称	寄騎館遺跡
遺跡記号	7 Y K D
所在地	秋田県仙北郡協和町峰吉川字芦沢通40
遺跡状況	畠地
調査対象面積	1,350m ²
調査面積	1,350m ²
遺跡性格	縄文時代小規模集落、縄文時代墓地、中世墓地
遺跡時期	縄文時代、中世
調査目的	バイパス改築工事
調査期間	平成8年8月19日～9月21日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査員	庄内昭男、高橋忠彦、高橋学、齊藤典芳
調査総務担当	藤肥良清、須田輝樹
調査協力機関	協和町教育委員会

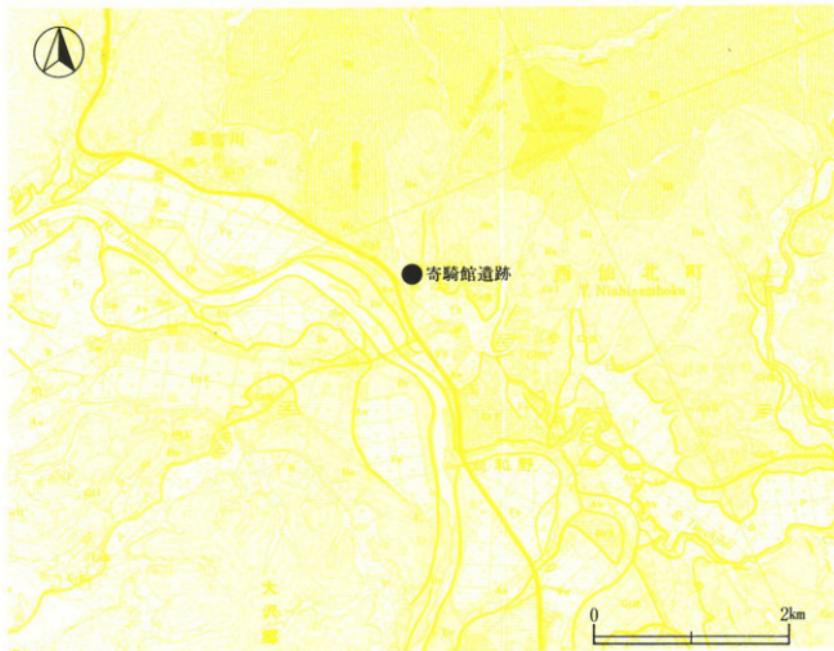
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と周辺地形

寄騎館遺跡の所在する仙北郡協和町は、秋田県内陸部の中央にあり、郡内では最も北西寄りに位置している。遺跡位置は東経 $140^{\circ}21'58''$ 、北緯 $39^{\circ}33'13''$ にあたる。

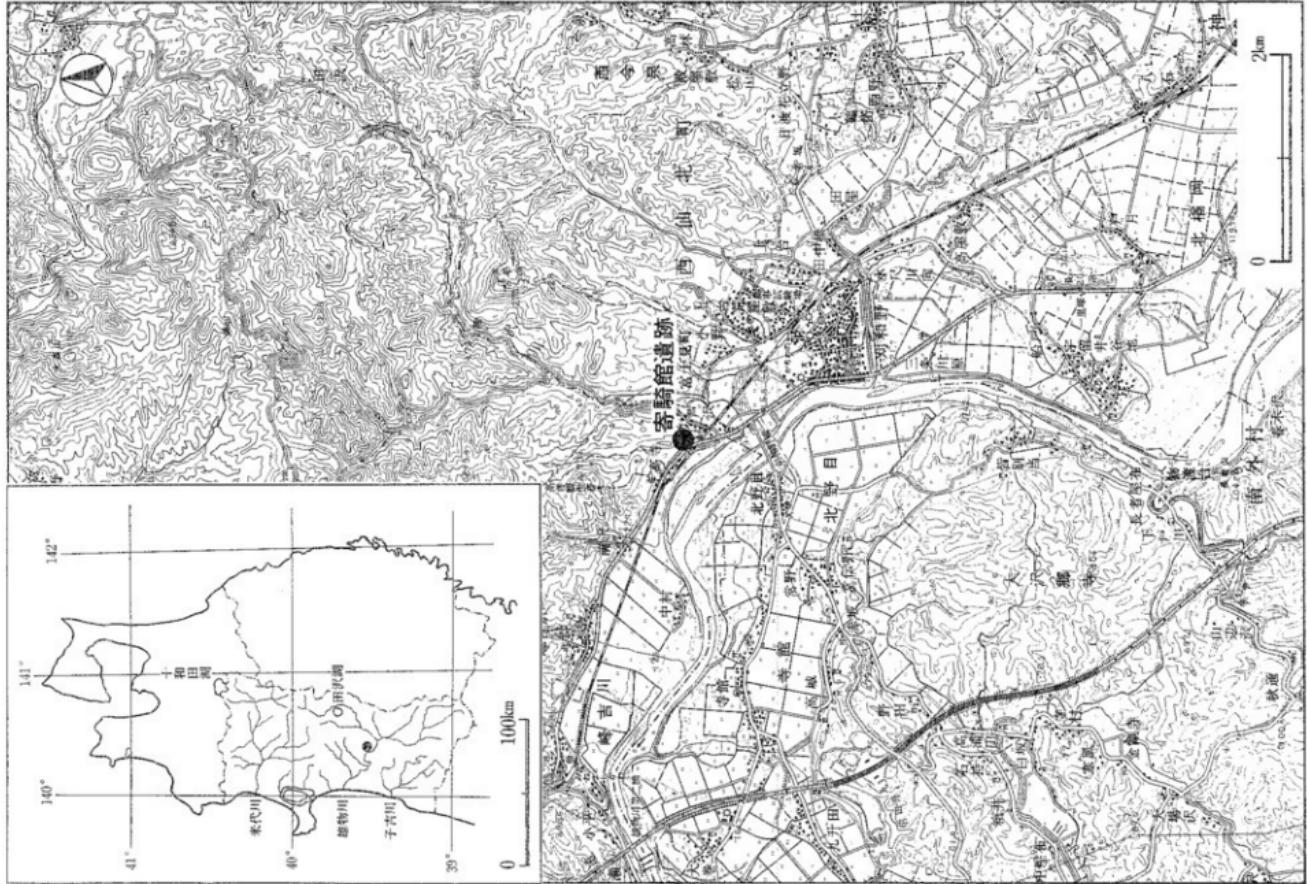
秋田県の中央を北西に向かって流れる雄物川は、中流域でいくつかの蛇行を繰り返しているが、協和町内では山地・丘陵の間を流れ、とくに大きな屈曲がみられる。西仙北町刈和野地区において南から北へ流れていた雄物川が、西に変わる大きな屈曲部が峰吉川芦沢地区である。そこでは流路が北の丘陵部で阻まれ、西に向きを変えといったことになる。

したがって河岸段丘面の発達は、雄物川の南岸で顕著であるが、北側では幅が狭い。その北の丘陵は町の東にある大森山・畠山（標高300m）が連なる小起伏山地から伸びたもので、平均標高200mで南に3kmほど張り出している。その丘陵地の東を区画しているのが源泉を集めて雄物川に注ぐ芦沢川であり、深い谷底平野を形成し、北から南へ流れこんでいる。遺跡は芦沢川の流れによって開析された西縁の丘陵先端部にあたる。



第1図 遺跡周辺の地形分類

第1節 遷跡の位置と周辺地形



第2図 遺跡の位置

第2節 周辺の遺跡

ここでは寄騎館遺跡の歴史的環境を理解するために、周辺10km圏内に所在する遺跡についての情報を集約した。地形的には雄物川の流域と、北の丘陵地で地続きとなる荒川流域の遺跡であり、また行政区画としては、協和町南部から西仙北町北部にかけての遺跡についてである。遺跡の所在と内容については、「秋田県史」「協和町郷土史」・「西仙北町史」・「秋田県遺跡地図」等に基づいて作成した。なお()内の番号は第3図に付した数字である。

旧石器時代の遺跡

米ヶ森遺跡(1)の発掘調査の開始は、昭和44年であり、その後4回にわたって調査されている。旧石器としてナイフ・搔器・彫器が発掘され、大きく2ブロックのまとまりをもつ石器製作の場所が確認された。とくにここでの小形の台形様石器の発見が契機となり、その後各地で同様な技術をもつ石器が発見されている。岸館(7)では旧石器が採集されている。

縄文時代の遺跡

前期・中期・後期・晩期の時期区分にしたがって遺跡を紹介する。和田の台B(11)・川又(13)遺跡で前期の土器破片が見つかっている。縄文中期の集落が米ヶ森(1)で調査された。平面形が楕円形をして複式炉を作り住居が9軒検出されており、地形から馬蹄形に配置されていたとみられる。岸館(7)も昭和50年に調査され、配石遺構が検出された。そのほか中期の遺物が採集された遺跡は、荒川流域で米ヶ森下(2)・和田の台A(10)・和田の台B(11)・西町後(8)がある。西町後では組石があったとの報告があるが、晩期の大洞式の土器も出土しており、遺構がどちらのものであるか判断できない。後期の遺跡は荒川流域にまとまっており、米ヶ森下(2)・下谷地(5)・中野(6)・中島(8)・和田の台C(12)・川又(13)がある。雄物川丘陵北では白滝(14)で後期の加曾利系の土器が採集されている。晩期の遺跡としては、雄物川の南岸に集中しており、いずれも段丘の縁辺に立地している。調査されていないが、常野(18)・高城(19)・角間沢(21)・杉山田がある。上の台(20)はその範囲が広いことから柏台あるいは強首野と呼称されており、「西仙北町史」では住居跡が発掘されたとの記録がある。県立博物館が編集した『武藤一郎コレクション図録』の中に強首出土の晩期前半の資料があり、上の台遺跡のものと推定される。雄物川北岸では四階沢(17)・岩瀬(16)があり、寄騎館はその中間点にある。荒川流域には野崎(4)があるが、地元では古くから遺物が採集されていたとあり、「協和郷上史」には大洞C式の精製土器が紹介されている。

弥生時代の遺跡

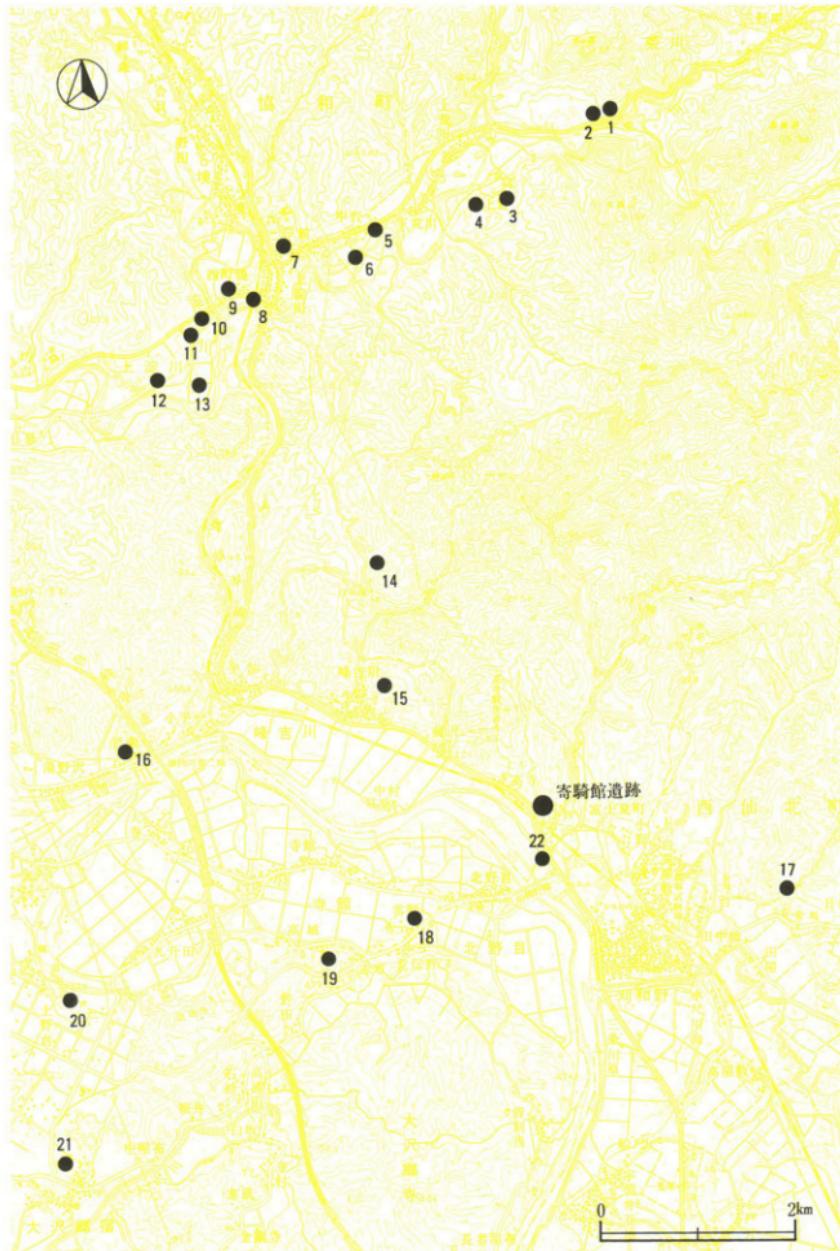
雄物川北岸の中沢(15)は標高60mであるが、天王山式土器とアメリカ型石鏃が発見されている。荒川流域では下谷地(5)でアメリカ型石鏃が、上野崎(3)で弥生土器が採集されている。

古代の遺跡

和田の台B(11)で須恵器が採集されている。

中世の遺跡

「秋田県の中世城館」では、寄騎館遺跡から国道を隔てた河岸段丘面に寄騎館跡(22)の所在を示している。遺跡と館跡とは距離的に離れており、関連性としては墓地の中に中世の板碑が確認されていることである。



第3図 周辺の遺跡分布

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

寄騎館遺跡は、秋田県仙北郡協和町峰吉川字芦沢通40に所在する遺跡である。協和町の南では畠山丘陵が、雄物川の流域に発達した低位段丘面に突き出していて、芦沢地区はその最も東側にあり、南に細長くのびた丘陵部にあたる。とくに東側には丘陵部から流れ出た芦沢川が深い谷底を形成し、西にも浅い谷が入ることから、遺跡のある芦沢地区は三角形状を呈しており、遺跡はその先端部に近い位置にある。

遺跡の立地する丘陵先端部の標高は最高部で30mで東縁に沿って宅地が並び、宅地との北高差は5mで、さらに谷底との北高差は15mである。遺跡から30mほど離れた西側を国道13号が走り、最寄りの駅は南に3kmほど離れたJR刈和野駅である。

遺跡の現況は畠であり、北東の一角には芦沢部落の共同墓地がある。かつては先端部がさらに南側に伸びていたと思われるが、JRの線路で削られその線路に近い一部が宅地化している。また東縁は部落の共同墓地に入る道路造成で削られている。

第2節 調査の方法

1 調査区の設定

調査を計画的に進めるために調査対象区に一区画4×4mのグリッドを設定した。遺跡内に所在する道路計画センター杭No.246を原点として国家座標第X系座標北を求めて、この座標北のラインを南北基線Y軸とし、これに直行するラインを東西基線X軸とした。規準交点No.246をM50とし、Y軸に2桁の算用数字、X軸にアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

2 発掘方法および記録作成

調査は北側頂部から始めて南側下部へ調査を進めていった。ほとんどの遺構は地山の明黄褐色土層で確認を行った。遺物は表土から地山まで掘り下げる間に出土したものを取り上げた。

＜遺物の記録＞遺物の記録作成・取り上げは次の方法で行った。南東隅の杭を基準としてグリッド内における位置を記録し、遺跡内における遺物番号を付して取り上げた。

＜実測図の作成＞精査した遺構は、調査区内に打設した方眼杭を基準として簡易な造り方測量によって図面を作成した。遺構の平面図・断面図は、1/10・1/20の縮尺で作成した。遺跡全体の土層図は、南北ラインを延長して作成した。土層図は1/20の縮尺で作成し、色調・土質等の特徴を記載した。

＜写真＞現場の写真は35mm判のカメラを用い、広角・標準レンズを適宜使用した。現場撮影用のフィルムはモノクロ、およびカラーリバーサルの2種類を使用した。遺物の写真撮影は35mm判のカメラを使用し、モノクロで行った。

3 遺物整理の方法

＜遺物の整理＞遺物は縄文土器と数片の須恵器および石器・石製品・錢貨が出土した。55×34×15cmのコンテナで20箱である。遺物のほとんどが縄文土器であり、石器は剥片石器と石器素材・礫石器である。また石製品が1点出土した。これらの遺物を洗浄し、接合作業を行った。石器と土器には、グリッド名・層位・出土年月日を注記した。

＜土器・石器の実測図作成＞ある程度復元された土器は図を作成し、土器破片については拓影を採った。

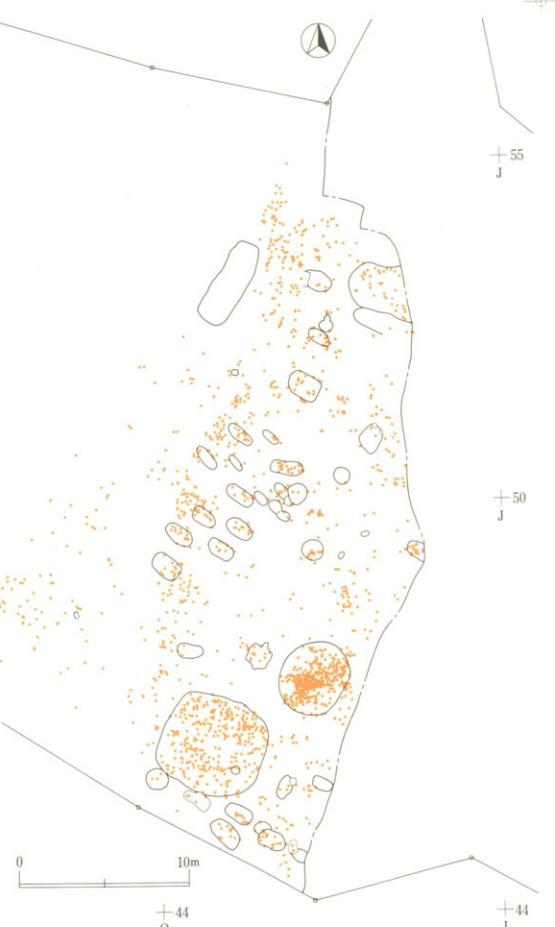
石器はすべて1／1で図化した。

第3節 調査日誌

- 8月19日 発掘機材の搬入を行い、発電機等の配置を終える。段々畑にされていた傾斜地に任意にトレントを入れ、表土を除いていく。
- 8月21日 段々畑に遺物の集中および遺構がないことを確認し、土捨て場とすることとした。平坦部の表土除去をはじめ足場の組み立てを行い、ベルトコンベアを設置する。
- 8月24日 平坦部の表土の除去にはいる。畑の区画部分を除いて表土は薄かった。
- 9月2日 土層観察用ベルトを除いていく。中央部の地山面の精査を行う。地山面で小判形の土坑を確認した。
- 9月3日 土坑を半裁し、掘り下げを行う。
- 9月4日 土層観察用ベルトを取り外す。北東側搅乱部の掘り下げを行う。
- 9月5日 第2号A・B竪穴住居跡と椭円形土坑のプランを確認し、掘り下げを行う。
- 9月6日 掘り下げを継続していたSX01の褐色土下に石組のが跡が見つかり、第1号竪穴住居跡であることが確かめられた。
- 9月9日 土坑を半裁し、掘り下げ。北側搅乱部の掘り下げを継続する。
- 9月10日 北側を中心に地山の精査を実施していく。
- 9月12日 雨に漏れた住居跡の周辺を精査する。さらに長円形の土坑群を確認する。
- 9月17日 遺跡の全景を写真撮影し、また遺構毎に撮影していく。
- 9月18日 遺構の平面図・断面図の作成を始める。
- 9月20日 遺構の平面図など図の修正・補足を加えて調査終了する。



第4図 グリッド配置



第5図 遺構配置と遺物出土地点

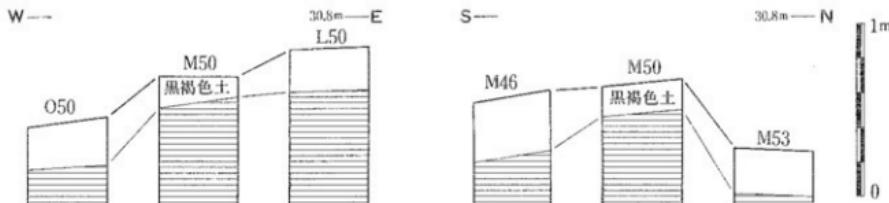
第4章 調査の記録

第1節 調査区の地形と層位

遺跡は、南に向かって細長く伸びた丘陵上にある。標高30mの平坦面が、20m幅で南北100mにわたって続き、調査区はその平坦部の中央から先端に近い部分にあたる。東と西は斜面となっているが、標高25mの等高線で比較すると、東の宅地に向かう方が急な段差がついているのに対し、西の水田に向かう方が緩やかで斜面となっている。ただし西斜面の先端は、段々畑に開墾されたため斜面に段差がつけられたところがある。南の先端部は、一部宅地に面した崖となっているが、削平は一部であると思われた。ただし墓地に入るための道路を掘削したため、入り口と丘の上の肩の部分の削平が大々的にされたものと見える。

遺跡の層状は、畑で耕作されていた軟らかい黒褐色土を取り除くと、その下は20cmほどで明黄褐色土となる。下の層は広い範囲にわたり、深さも一定していることから、遺構確認は明黄褐色土層で行った。なお黒褐色土は畑の西縁の部分で厚く、開墾の際平坦面を作るために、東の上位面から下位の西方向へ黒褐色土が移動されたものと思われた。

ところで地山の明黄褐色土層で無数の小穴が見つかったが、それはかつて稻穂の乾燥のため、稻架を設置した痕跡であることがわかった。したがって調査区は一時原野であり、その後畠地にする際に黒褐色土が大量に移動されたとみられる。



第6図 基本層序

第2節 検出遺構と出土遺物

調査区で検出した遺構は、住居跡(掘り込みが大きく炉を持つ)が2軒と、土坑(掘り込みだけ)が20基・上器埋設遺構3基・火床2基・焼土遺構1基であり、標高29~30mの地点に集中している。

この節では検出した遺構の確認状況・形態的特徴等を項目を設けて考察し、その内容を記した。遺構説明の順序としては、遺構の位置・構築年代等を考慮し、住居跡から土坑・土器埋設遺構・焼土遺構の順とした。なお土坑の説明は、煩雑さをさけるため形態・規模で分類したアルファベットを付して説明していく。

A 土坑：形状が橢円形あるいは小判形を呈するもので、掘り込みが浅い。長径が1mを越えるものである。

B 土坑：形状が橢円形を呈するもので、掘り込みが浅い。長径が0.6~1mほどである。

C 土坑：形状が円形を呈するもので、掘り込みが深い。直径が1mほどである。

各遺構の構築年代は、遺構内の出土遺物を決定根拠としたが、ほかに遺物の出土状況の相対的な比較と土層観察の結果も考慮して決めた。なお最終的には縄文時代中期後半・縄文時代晚期・中世以降に分かれる。本節では分類を優先したが、特定遺構については決定方法を示し、まとめとして考察の結果を示した。

1 竪穴住居跡

第1号住居跡(SI01)(第7~10図、図版3)

＜位置＞調査区の南に寄った場所にある。N46グリッドに大部分があり、M46グリッドに東側の一部が、M45・N45グリッドに南側の一部がかかる。

＜確認状況＞明黄褐色土層の地山面を精査して、黒色土の大きな落ち込みとして確認したが、分布調査のトレンチが上面を通り、褐色土上面でとどまっていたことから、はじめはすり鉢状の落ち込みと考えていた。トレンチにあわせて土層観察をしながら、掘り下げていく段階で跡を見つけ、住居跡であることがわかり、褐色土は壁際の堆積土であることを確認した。また埋設した土器を埋土の上面で見つけたが、住居跡が埋もれた後に設けられたものである。第1号上器埋設遺構として別に取り扱う。

＜平面形・規模＞コーナーが丸みをもつていて円形に近いが、対応する辺の曲がりが弱く、見方によっては隅丸方形ともとれる。東西の対応する円弧の最大幅が6mであるが、壁が深く立ち上がり、広さを感じる。

＜堆積土＞中心に向かって渦むレンズ状の堆積をしており、上位から中位は黒褐色土が間に黒色土を挟んで厚く堆積し、壁に沿った下位には褐色土が帯状に巡っている。自然堆積の状況を示す。

【各部位の状況】

＜壁＞底辺に沿ってほぼ垂直に立ち上がり、中位より上がわずかに外に傾斜して開く。4辺の中央における確認面からの深さは0.6mでほぼ均一である。

＜周溝＞壁に沿って堅くしまった褐色土(炭化物粒子の混在多い)を掘り込んで確かめた。北東コーナーを除いて、壁に沿って幅15~20cmで巡り、深さは20cm前後であった。なおコーナーの柱穴位置に対応して、周溝内には大きさが異なる小さいピットがあった。

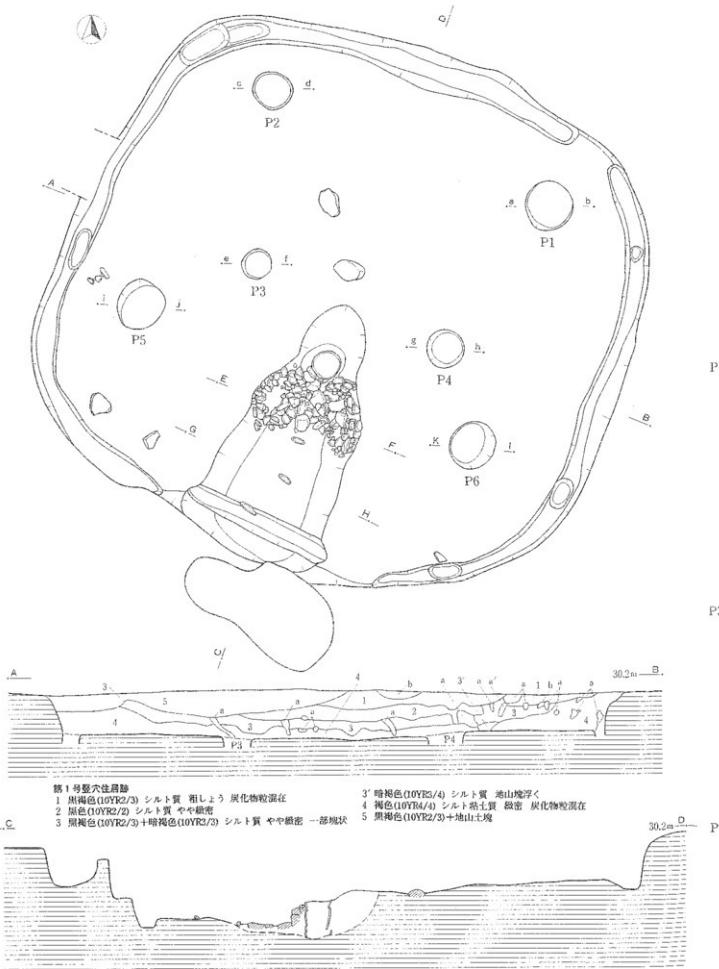
＜床面＞床面に6本の柱穴が確認された。4本はコーナーに近い場所に、2本は住居の中間を通る東西線を3分割するような場所に配置されている。なおコーナーにある4本の配置をみると、南に空間をあけ北側に寄っている。6本の柱穴の断面を観察すると、開口部と底面の幅がほぼ同じで、垂直に掘り込まれており、柱穴の土壠断面では側面に粘土小塊が詰まっていたことから、根固めの痕跡が残ったものと見えた。

＜ガレ＞住居の南辺の中央にあり、ガレの真中が住居跡の南北の中軸線となる。北から土器埋設部・石組み部・掘り込み部となり、掘り込み部が壁下の周溝にとりついている。全体が扇形に近い。土器埋設部と石組み部は焼成を受けて赤変し、石はかなり脆くなっていた。各部位について説明すると、土器埋設部では、胴部上半までしかない深鉢形土器を正位に据えており、掘り方は上器より一回り大きい。石組み部は、不揃いの大小の石を組み合わせ、平坦な底面と傾斜のある側面を作り出していた。北側が土器を支え、南側が掘り込み部に対応して広がっている。掘り込み部は石組み部と底部の深さおよび側面の傾斜角度は同じだが、壁に向かって開いていく。

＜遺物の出土状態＞埋上内上面で土器破片ないし石器・石器素材剥片が出土している。水平分布状況は住居跡のプランに対して同心円状となっていること、垂直分布状況がレンズ状であること、上位の1層から3層内に縄文晩期の土器が混在していることから、晩期の段階で中央が窪地となっていたとも考えられる。床面近くでは柱穴の埋もれた上に大木10式の深鉢土器が横たわっているのが確認された。そして炉の埋設土器と比較して、底部が小さく胴下半に最大径があるという似たようなプロポーションをもっていることから、住居の帰属する時期に関わるものととられた。

＜住居の年代＞炉の埋設土器と床面近くに出土したのが大木10式であり、縄文中期後半の住居と考えられる。

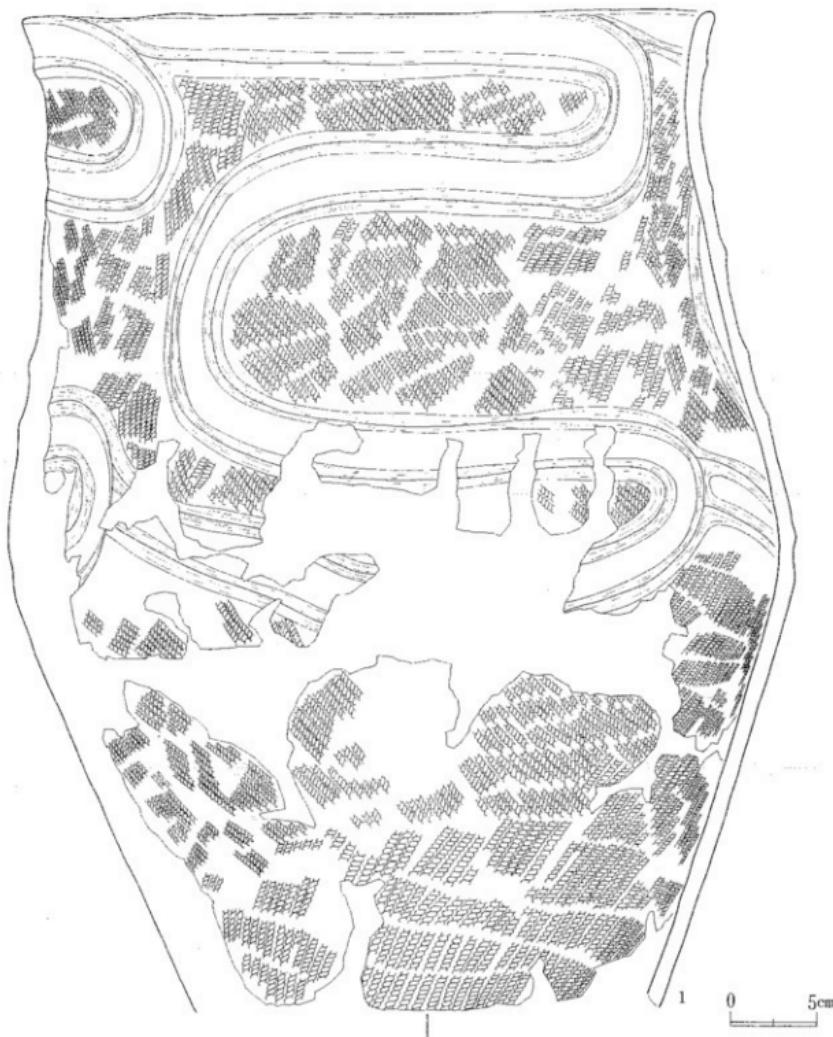
第2節 檢出遺構と出土遺物



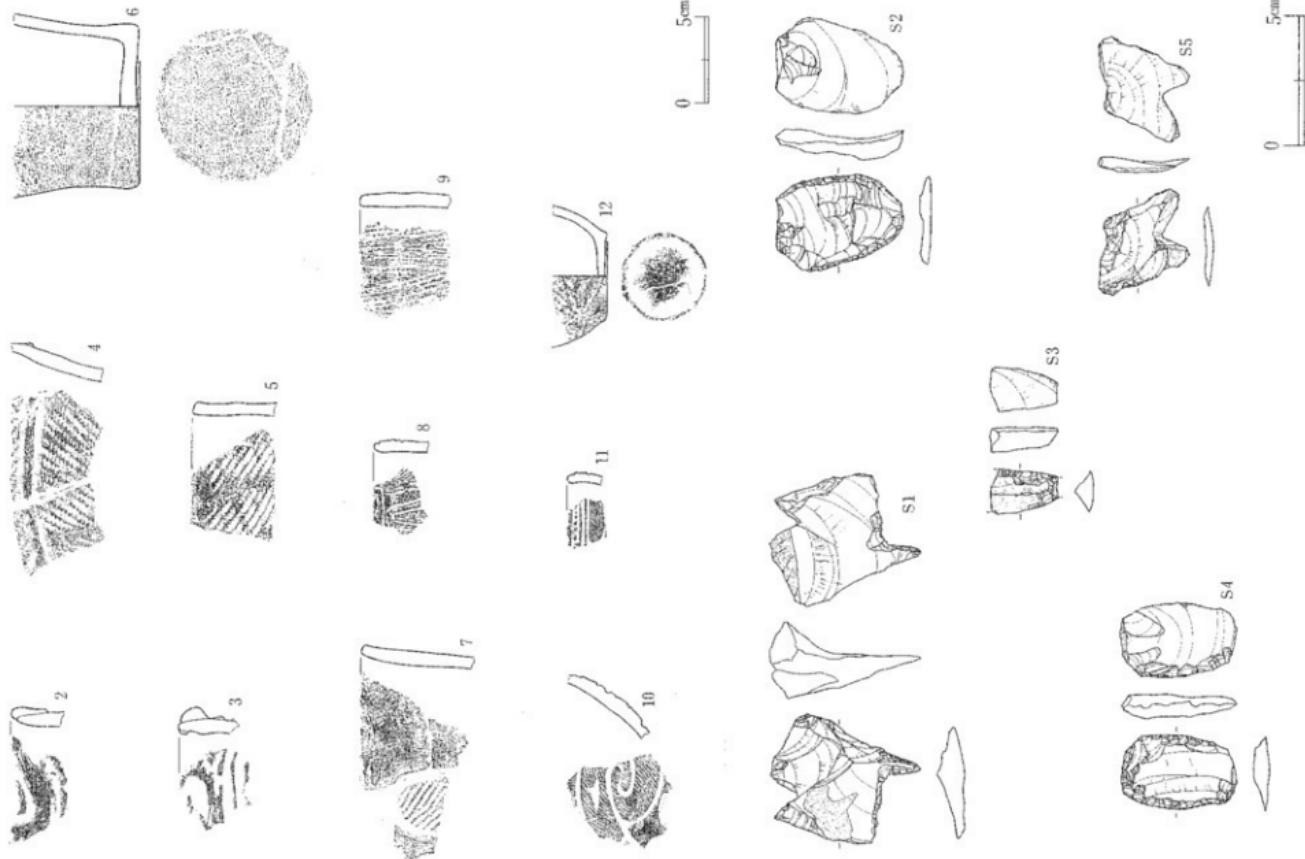
第7図 第1号竪穴住居跡

-13-14-

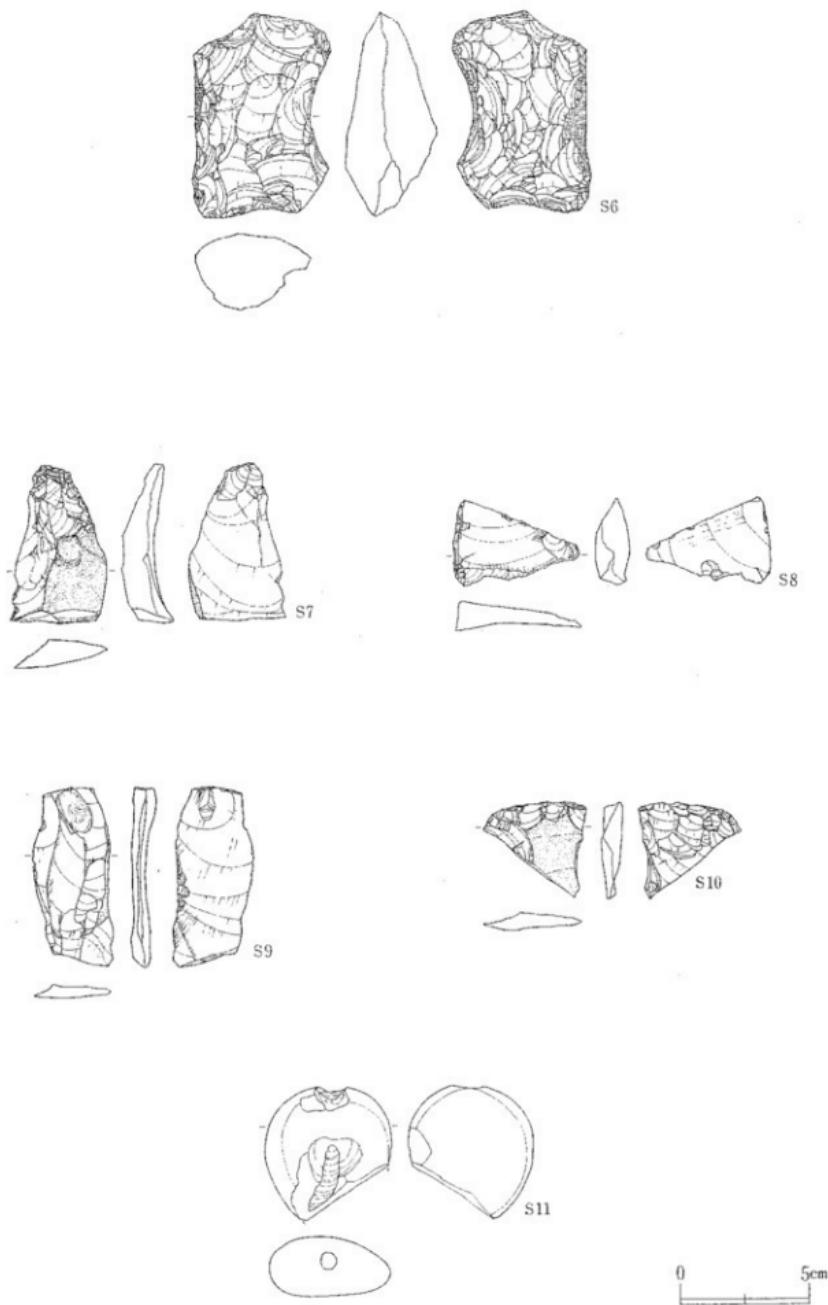
<出土遺物>①は大型の深鉢形土器であり、床面に接して出土した。胴部中位に最大径がある。R1縄文を地文として、S字状の沈線で区画した文様帯を持つ。埋土からは大木7式や大洞BC式の上器片が出土し、石器では石錐(S1)やスクレイパー(S2~S4)がある。



第8図 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)



第9図 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)



第10図 第1号竪穴住居跡出土遺物(3)

第2号A・B号住居跡(SI02)(第11~13図 図版4)

＜位置＞大部分がL47グリッドにあり、南側の一部がL46に、西側の一部がM47グリッドにかかっている。＜確認状況＞黒褐色土層面に多くの土器・石器・石器素材が見つかり、周囲の明黄褐色土層を精査して楕円形のプランを確認した。

＜確認事項＞埋土を掘り下げるべく、住居の南と北で明確な段差があること、ピット状の落ち込みを半切した結果、火床面が下から出てきたことから、2軒の住居が重複し、北東へ拡張された可能性が高いと考えた。＜平面形・規模＞拡張される前の住居をAとし、拡張された後の住居をBとする。Aは円形を呈しており、直径が4mである。Bは楕円形を呈しており、長径が4.5mである。

＜堆積土＞上面は薄い黒褐色土が覆い、下層は褐色土である。下は混入物などから3ブロックに分層された。

【各部位の状況】

＜壁＞Bプランの北壁は10cmほどの高さがある。南側の壁ははっきりしない。

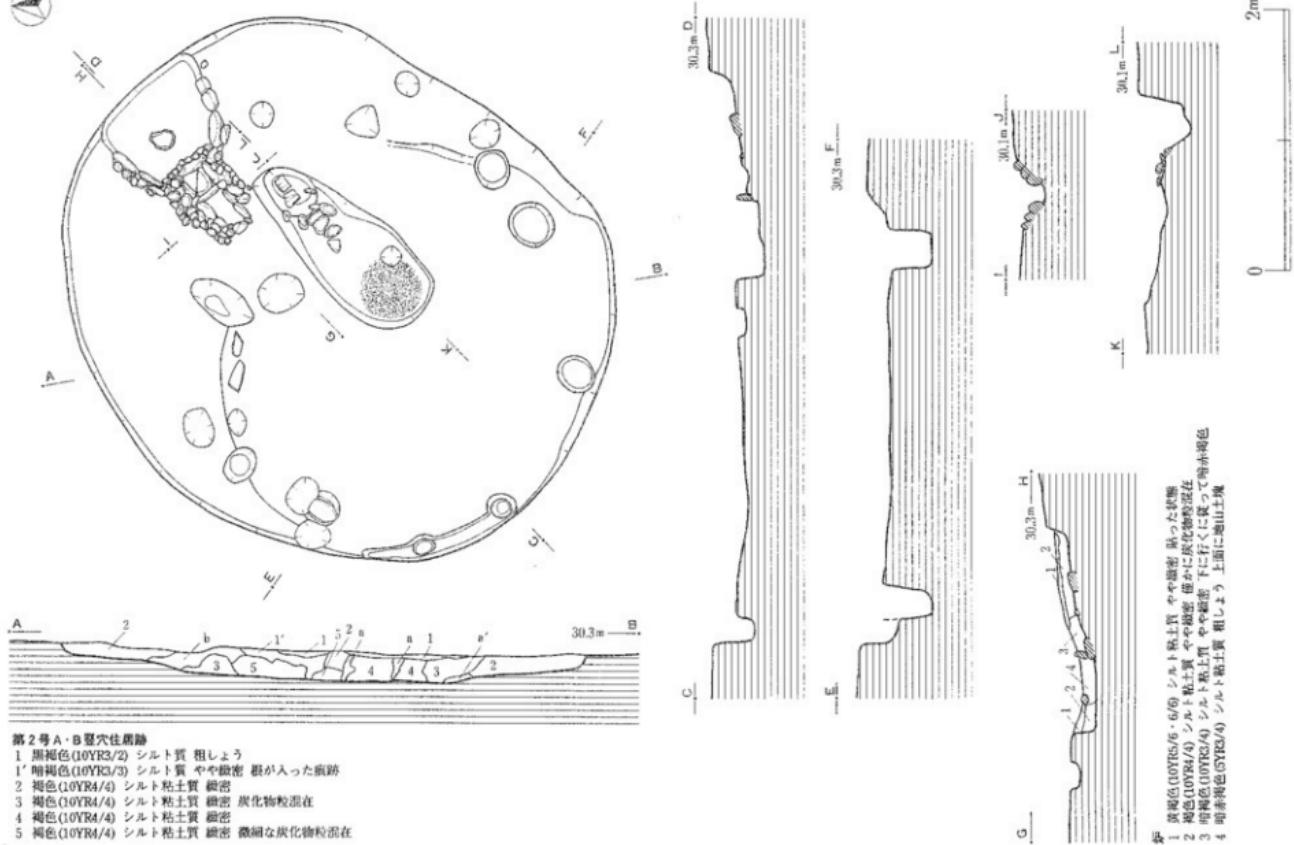
＜床面＞Aプランの中央が窪んでおり、Bプランの拡張部分も中央に向かって傾斜している。

＜柱穴＞壁周辺に沿ってピットが数個あるが、巡るようすも、規則性もない。特徴としては内側に傾斜するものがある。

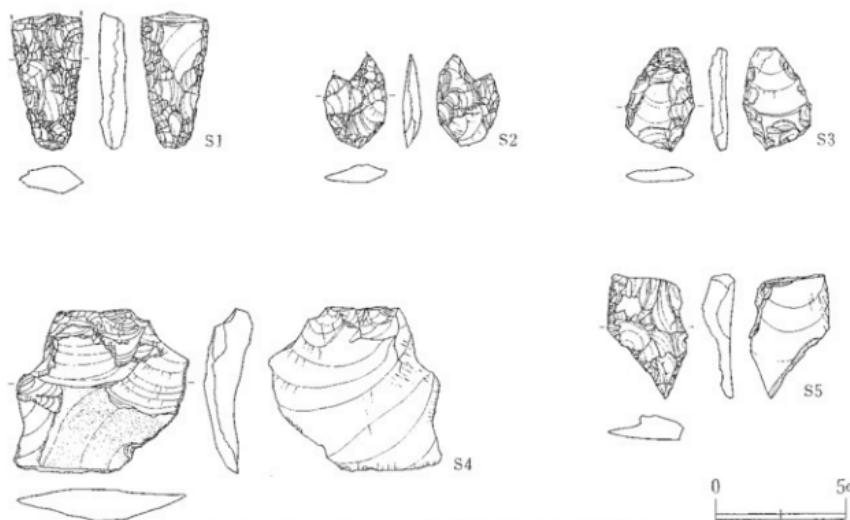
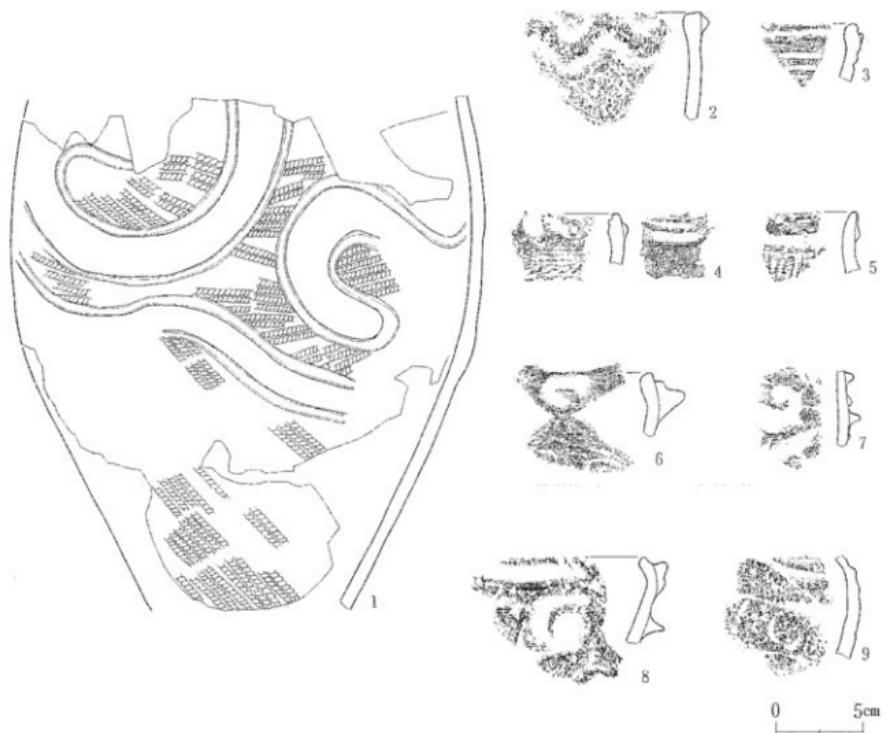
＜炉＞Aの炉は、円形プランの北寄りにある掘り込み内の焼けた火床部がその一部であると推定している。Bプランの炉跡は北壁側にある。小穴部・石組み部・縁を石で囲んだ台形掘り込み部が北壁へつながっている。各部位について説明すると、小穴部は平面が辺30cmの方形で、深さが25cmである。石組み部の平面はU字状を呈し、長円形の石を浅い掘り込みの側面に三段積みしており、底面には真中を区切る幅広の石を1個置いている。石組みの端に取りついで掘り込み部があり、石組の北端と同じ高さで底面がある。掘り込みの側面を扁平な石が縁取っている。なお小穴部と石組み部が焼け、とくに石組み部の側面がよく焼けている。

＜遺物の出土状態＞

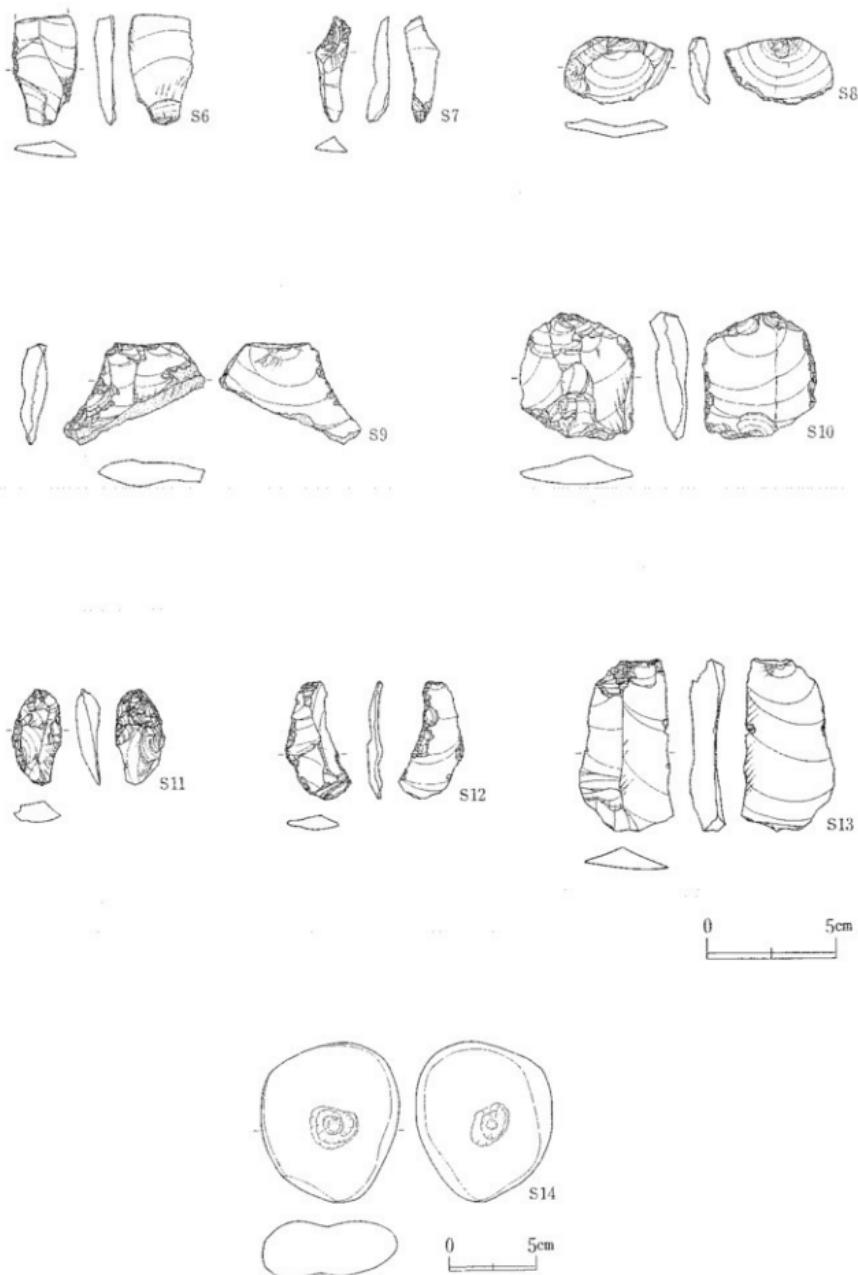
大型の石が上面にあり、さらに土器破片・石器・石器素材剥片が底面より浮いた状態で、中心に集中して出土した。Aプランのピット内には土器のまとまりがあり、Aプランの構築時期と関わるものと考えられる。＜遺構内出土遺物＞1はAプランのピットから出土した土器で、LR繩文を地文としてクランク状の文様が胴部中央まで施文されている。土器2~9は埋土中の出土で、大木7~10式である。石器では石槍(S1・S2)・スクレイバー(S3~S5)・使用痕のある剥片(S6~S18)の他に、円形の凝灰岩の両面中央に窪み部のある凹石がある。



第111図 第2号A・B竪穴住居跡



第12図 第2号A・B竖穴住居跡出土遺物(1)



第13図 第2号A・B竪穴住居跡出土遺物(2)

2 土坑

最も多く見つかったA土坑を、調査区の南側から順に説明していく。

第1号A土坑(SK20)(第14図 図版7)

＜位置＞N45グリッド杭に南側の一部がかかる。

＜確認状況＞地山の明黄褐色土層を精査し、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞小判形を呈している。長軸は東西にあり、最大幅1.74mで、南北の幅は1.0mである。

＜堆積土＞底面から中位には暗褐色土が堆積し、上位には地山上小塊が混在した黄褐色土が覆っていた。

上位では掘り上げた土を後に埋め込んだように見える。

＜側面＞底辺との境ははっきりしている。東西の側はほぼ垂直に、南北の側は傾斜して開いている。東西の確認面からの深さは25cmである。

＜底面＞ほぼ平坦である。西側の底面近くに赤色顔料がまとまっていた。

＜遺構内出土遺物＞埋土の上位から中位で縄文中期の土器破片と石器素材剥片が出土し、中位には摩滅した厚手の土器が数破片混在していた。

第2号A土坑(SK21)(第14図 図版6・7)

＜位置＞M45グリッドの西側に位置している。

＜確認状況＞地山の明黄褐色土層を精査し、暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜平面形・規模＞小判形を呈している。長軸は東西にあり、最大幅は1.66mで、南北の幅は0.86mである。

＜堆積土＞底面から上位にかけて暗褐色土が堆積していたが、上位の中央には地山の明黄褐色土小塊がまとまっており、掘り上げた土を後に埋め込んだように見える。

＜側面＞底辺との境ははっきりしており、四方ともに底辺から傾斜して外に開いている。東西の確認面からの深さは30cmである。

＜底面＞平坦である。底面からわずかに浮いた状態で、西側に赤色顔料がまとまっていた。

＜遺構内出土遺物＞埋土上位で摩滅した土器の小破片と石器素材剥片2点が出土している。

第3・4号A土坑(SK22・23)(第14図 図版7)

＜位置＞第3号A土坑の中心がM45グリッド杭の西側にあり、杭から1.5mほど離れている。第4号A土坑はM45グリッドの南側に位置している。

＜確認状況＞いずれも地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土・暗褐色土の落ち込みとして確認した。

＜重複関係＞第3号A土坑が、西側で第4号A土坑を切っている。

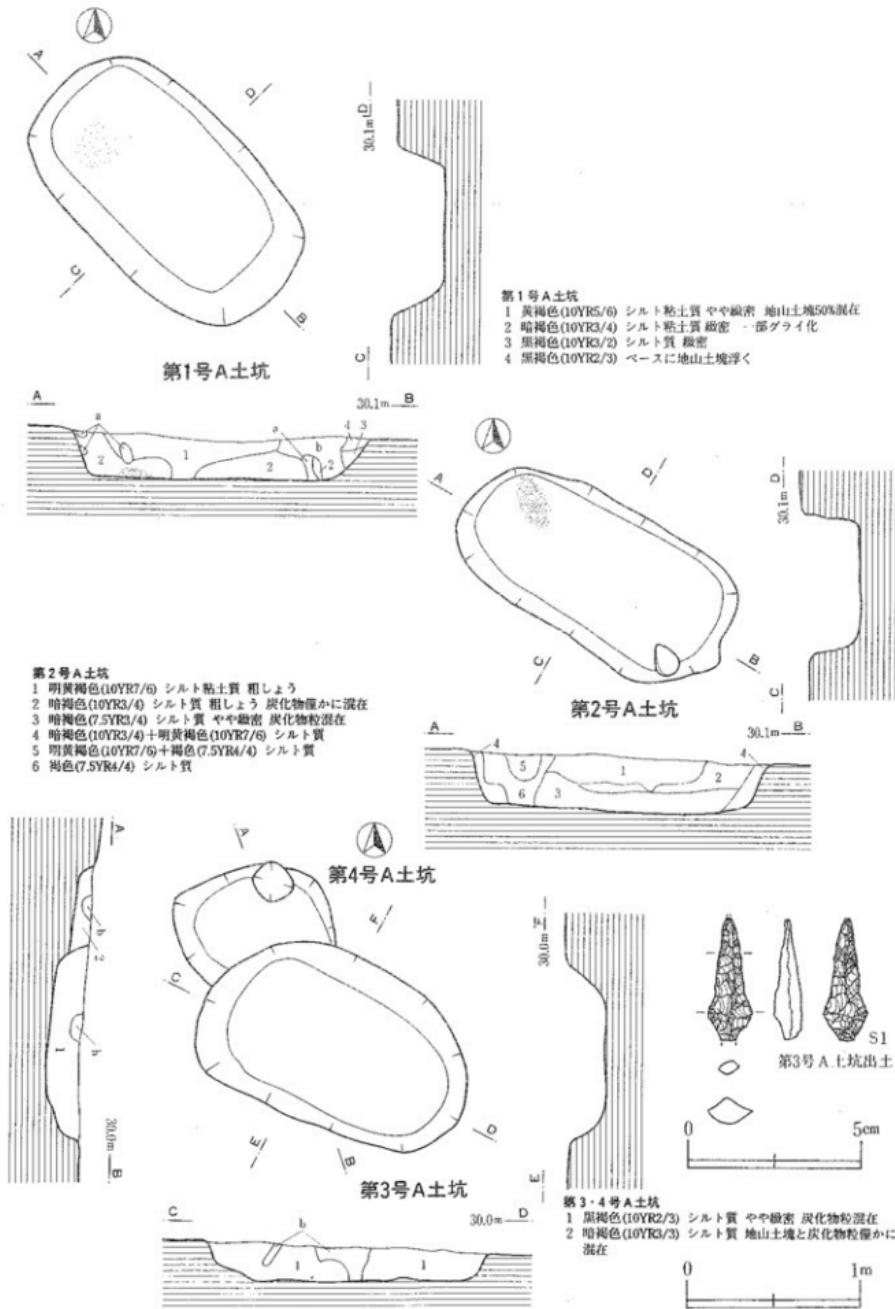
＜平面形・規模＞第3号A土坑は小判形を呈している。長軸は東西にあり、最大幅は1.62m、南北の幅は1.0mである。第4号A土坑は小判形を呈し、長軸は南北と思われるが、確認できた東西の幅は0.88mである。

＜堆積土＞第3号A土坑では黒褐色土が一様に充填し、第4号A土坑の西側に残った部分では暗褐色土が充填していた。＜側面＞第3・4号A土坑とともに底辺との境ははっきりせず、傾斜して外に開いている。第3号A土坑では確認面からの深さは西側で25cmである。第4号A土坑では確認面からの深さは西側で8cmである。

＜底面＞第3号A土坑はほぼ平坦であるが、第4号A土坑は中心に向かって窪んでいる。

＜第3号A土坑内出土遺物＞底面近くより無文の土器破片2点と埋土から石錐(S1)が出土している。

＜第4号A土坑内出土遺物＞摩滅した土器破片が埋土中に混在している。



第14図 第1～4号A土坑

第4章 調査の記録

第1号竪穴住居跡を挟んで東と西に位置する土坑群である。第8号A土坑は単独に所在する。

第5号A土坑(SK24)(第15図)

<位置>中心がM45グリッド杭から0.7mほど南側にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。西側は新しいピット状の掘り込みで切られており、さらに東側は道路拡幅で削平され崖面となっていた。

<平面形・規模>長軸は東西にあったが、東西の幅は不明で、南北の最大幅は0.8mである。

<堆積土>黒褐色土が充填していた。<側面>底辺との境ははっきりせず、東西の壁は傾斜して外に開いている。東側での深さは20cmである。<底面>中央に向って窪む。<遺構内出土遺物>底面近くより斜行縄文が施された土器破片が出土した。

第6号A土坑(SK25)(第15図)

<位置>M45グリッドの北東側に位置している。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>小判形を呈している。長軸は南北にあり、最大幅は1.34m、南北の幅は0.78mである。

<堆積土>底面から上位にかけて暗褐色土が一様に充填していた。底面には地山土小塊が浮いていた。

<側面>底辺との境は丸みをもっており、四方ともに底辺から傾斜して外に開いている。北側で確認面からの深さは10cmである。<底面>ほぼ平坦である。<遺構内出土遺物>遺物は出土していない。

第7号A土坑(SK26)(第15図)

<位置>L45グリッドの北西側に位置している。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>小判形を呈している。長軸は東西にあり、最大幅は1.2m、南北の幅は0.7mである。

<堆積土>底面から上位にかけて暗褐色土が一様に充填していた。底面に地山土小塊が浮いていた。

<側面>底辺との境は丸みをもっており、四方ともに底辺から傾斜して外に開いている。北側での確認面からの深さは10cmである。<底面>ほぼ平坦である。

<遺構遺物出土状況>埋土中より摩滅した土器破片2点が出土した。

第8号A土坑(SK36)(第15図 図版8)

<位置>N47グリッドの北西側に位置している。

<確認状況>西側で新しいピットが重なり合っていたこと、溝状に明黄褐色の地山上小塊があり、畠の擾乱と同方向であったことから遺構としての確認が遅れた。西側のピットを広げていって確認した。

<平面形・規模>東側は楕円形に近いが、西北側が大きく膨らんでいる。東西に長軸方向があり、最大幅が1.52m、南北の幅は0.84mである。

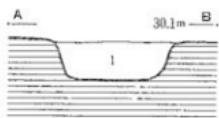
<堆積土>上面では明黄褐色土の地山土小塊が厚く覆っており、掘り下げるまで土坑と確認できなかった。

底面付近の充填土は黒褐色土であった。東壁に接して赤色顔料が検出され、10cm前後の厚さがあった。

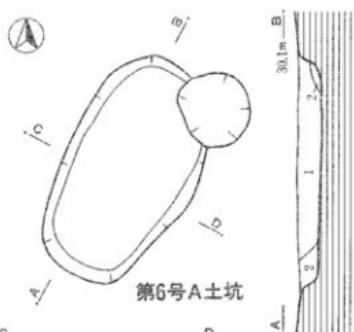
<側面>底面との境は丸みをもち、傾斜して外に開いている。確認面からの深さは南北で0.34mである。

<底面>平坦である。

<遺構内出土遺物>遺物は出土していない。



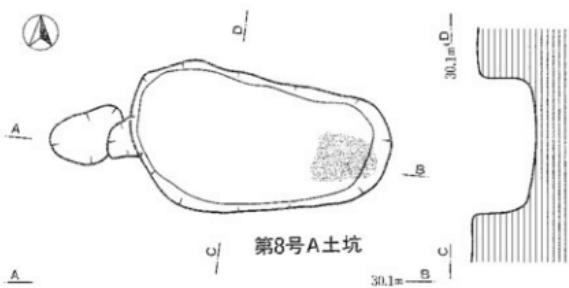
第5号A土坑
1 黒褐色(10YR3/3) 岩密 炭化物粒混在



第6号A土坑
1 黒褐色(10YR3/2) 下位に地山土塊
2 單褐色(10YR3/3) 地山土塊混在



第7号A土坑
1 黒褐色(10YR3/2)
2 單褐色(10YR3/4) 下位に地山小塊



0 1m

第15図 第5～8号A土坑

第9～11号A土坑は西側で、第12・13号A土坑は東側で並列している。

第9号A土坑(SK04)(第16図)

＜位置＞O49グリッド杭に南側の一部がかかる。

＜確認状況＞地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜堆積土＞黒褐色土が一様に充填していた。

＜平面形・規模＞小判形を呈する。東西に長軸方向があり、東西の最大幅が1.66m、南北は1.14mである。

＜側面＞底辺との境は丸みをもち、底辺からやや外に傾斜している。東側の確認面から深さは15cmである。

＜底面＞中央に向かって傾斜している。

＜遺物出土状況＞遺構上面に中期の土器破片が点在していたが、遺構が傾斜地の肩にあり、遺物の傾斜も一致していることから後世に傾斜地に移動されたものと判断した。

第10号A土坑(SK05)(第16図 図版8)

＜位置＞N49グリッドの西側に位置している。

＜確認状況＞地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜堆積土＞上下ともに黒褐色土をベースとしているが、上位には明黄褐色土粒子の混在が多く認められた。

＜平面形・規模＞小判形である。東西方向に長軸があり、東西の最大幅は1.74m、南北は幅0.88mである。

＜側面＞底辺との境ははっきりしており、東と北側は底辺からほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは30cmである。西側は10cmほど浅く、傾斜して外に開いている。

＜底面＞平坦である。東壁際には底面から15cmほど落ち込む小ピットがあり、西壁際もやや窪んでいる。

＜遺物出土状況＞埋土上位に摩滅した中期の土器破片が点在していた。

第11号A土坑(SK06)(第16図 図版8)

＜位置＞N49グリッドの北側に位置している。

＜確認状況＞地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜堆積土＞黒褐色土が一様に充填していた。

＜平面形・規模＞小判形を呈する。東西方向に長軸があり、東西の最大幅は1.36m、南北幅は0.8mである。

＜側面＞底辺との境ははっきりしており、四方の壁は傾斜して外に開いている。東側で深さは25cmである。

＜底面＞平坦である。東壁に沿ってわずかに溝状に落ち込む部分がある。

＜遺物出土状況＞埋土上位に縄文前期・中期の土器破片が点在していた。

第12号A土坑(SK07)(第16図 図版9)

＜位置＞N49グリッドの南東隅にある。

＜確認状況＞地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

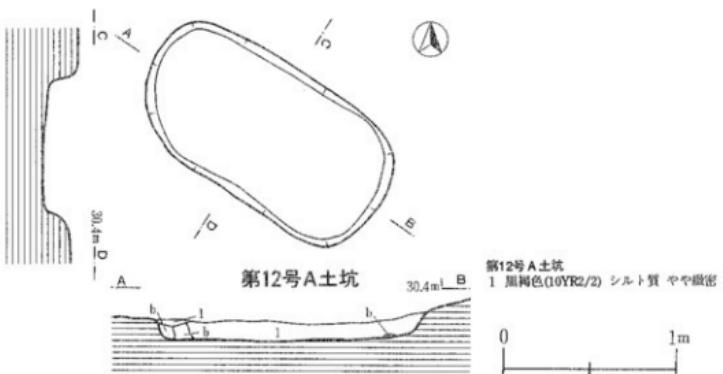
＜平面形・規模＞小判形を呈する。長軸は東西にあり、東西の最大幅は1.56m、南北の幅は0.82mである。

＜堆積土＞黒褐色土が一様に充填していた。

＜側面＞底辺との境ははっきりしており、四方の壁は傾斜して外に開いている。東側で深さは10cmである。

＜底面＞平坦である。

＜遺物出土状況＞埋土上位に中期の土器破片を含め、斜行縄文を施したものが出土した。



第16図 第9~12号A土坑

M50・N50グリッド周辺のA土坑について説明する。

第13号 A土坑(SK08)(第17図 図版9)

<位置> M49グリッドの北西側に位置している。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>楕円形を呈する。長軸は東西にあり、東西の最大幅は1.52m、南北の幅は0.9mである。

<堆積土>西側の壁際に暗褐色土が入り込んでいたが、大部分は黒褐色土が充填していた。

<側面>底辺の境ははっきりし、四方ともに外に傾斜している。東西の確認面からの深さは23cmである。

<底面>ほぼ平坦である。

<遺物出土状況>埋土中位から下位に斜行縄文、無文の土器破片が含まれていた。また西側の底面近くでミニチュア土器が出土した。

第14号 A土坑(SK12)(第17図 図版9)

<位置> N50グリッド杭のすぐ東側にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>小判形を呈している。長軸は東西にあり、東西の最大幅は1.68m、南北の幅は0.82mである。

<堆積土>底面には5cm前後の厚さで暗褐色土が薄く堆積し、下位から上位は黒褐色土が厚く覆っていた。

<側面>底辺の境ははっきりしている。東西の壁は外に傾斜し、南北側は垂直に立ち上がる。東側の確認面からの深さは30cmである。

<底面>ほぼ平坦である。

<遺物出土状況>埋土中および底面近くで斜行縄文の土器破片が出土したが、いずれも摩滅していた。

第15号 A土坑(SK18)(第17図)

<位置> N50グリッドの北東側にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<堆積土>底面には地山土塊が浮いており、東側の中位には黒褐色土の堆積があるが、その上位を黑色土が覆い、西側が厚い堆積となっている。

<平面形・規模>細長い小判形を呈している。長軸は東西にあり、最大幅1.54m、南北の幅0.64mである。

<側面>底辺との境は丸みをもっており、ほぼ垂直に立ち上がる。東北側で確認面からの深さは30cmである。

<底面>平坦である。<遺物出土状況>埋土上位から中期の土器破片1点と石器素材剥片が出土した。

第16号 A土坑(SK28)(第17図 図版10)

<位置> N51グリッド杭のすぐ東側にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

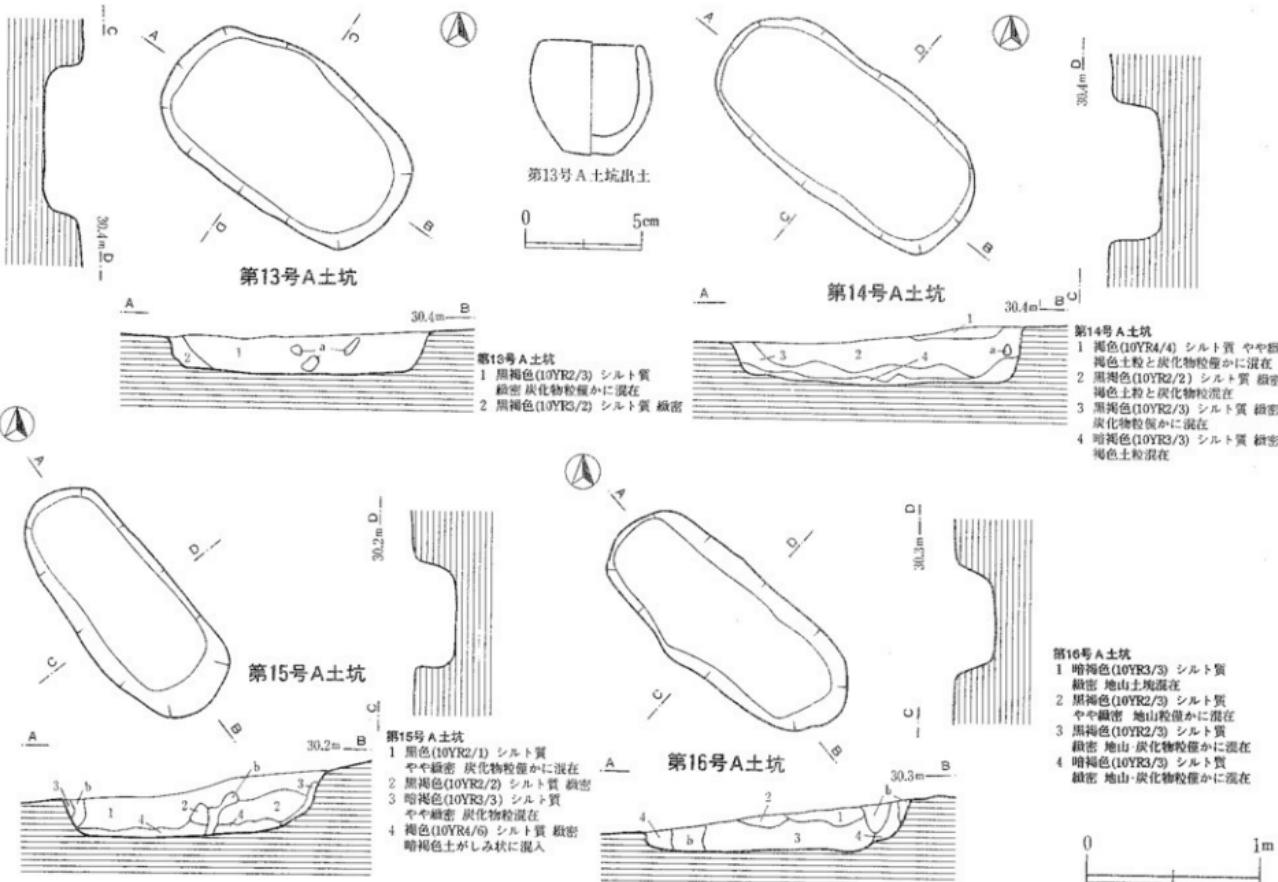
<堆積土>底面から上位にかけて黒褐色土が充填し、上位の一部に地山土塊が混在した暗褐色土が覆う。

<平面形・規模>細長い小判形を呈している。長軸は東西にあり、最大幅は1.62m、南北の幅は0.7mである。

<側面>底辺との境は丸みをもち、底辺から傾斜して外に開いている。東側で深さは26cmである。

<底面>ほぼ平坦である。

<遺物出土状況>埋土上位で摩滅した羽状縄文と斜行縄文が施された土器片、石器剥片3点が出土した。



第17図 第13~16号A土坑

K49グリッド、50ラインより北側のA土坑について順に説明していく。

第17号 A 土坑(SK15)(第18図 図版10)

<位置> M50グリッドの東側に位置している。

<確認状況> 地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<堆積土> 底面には暗褐色土が東から西に傾斜して堆積し、下位から上位には黒褐色土が厚く覆っている。

<平面形・規模> 不整小判形を呈している。東西に長軸があり、東西の最大幅は1.84m、南北の幅は0.82mである。

<側面> 底辺との境ははっきりしており、東西の側はほぼ直に、南北の側はやや傾斜して外に開いている。東側の確認面からの深さは32cmである。<底面> 平坦である。

<遺物出土状況> 埋土中位から下位に斜行縄文の土器破片が20点ほど散在し、石器剥片2点が含まれていた。

第18号 A 土坑(SK31)(第18・19図)

<位置> K49グリッドの南東部にあり、東半分は道路敷設の際削られ、崖面となっている。

<確認状況> 確認面は地山の明黄褐色土層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模> 東西に長軸があり、楕円形を呈するとみられる。南北の最大幅は0.84mである。

<堆積土> 黒褐色土が一様に充填していた。

<側面> 南北の側は傾斜して外に開いている。北側の確認面からの深さは20cmである。

<底面> 平坦であるが、西側では壁を斜めに掘り込んだピット状の落ち込みがある。

<遺物出土状況> 埋土上位から中位に縄文後期終末の土器破片10点と中期の摩滅した土器が散在し、石器剥片2点が含まれていた。

第19号 A 土坑(SK27)(第18・19図)

<位置> L52グリッドの南西側に位置している。

<確認状況> 地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模> 不整な楕円形を呈する。長軸は東西にあり、最大幅1.38m、南北の幅は0.7mである。

<堆積土> 底面に地山土塊が混在した黒褐色土が堆積し、下位から上位には焼土・炭粒子が混在した黒褐色土が充填していた。

<側面> 底辺との境は丸みをもち、四方は傾斜して外に開いている。東側の確認面からの深さは15cmである。

<底面> わずかに中央が窪むが、ほぼ平坦である。<遺物出土状況> 遺構確認面と同じ高さで中期の土器と斜行縄文の薄手土器破片が散在していた。埋土中に石器剥片2点が含まれていた。

第20号 A 土坑(SK35)(第18図)

<位置> L53グリッドの南西側に位置している。

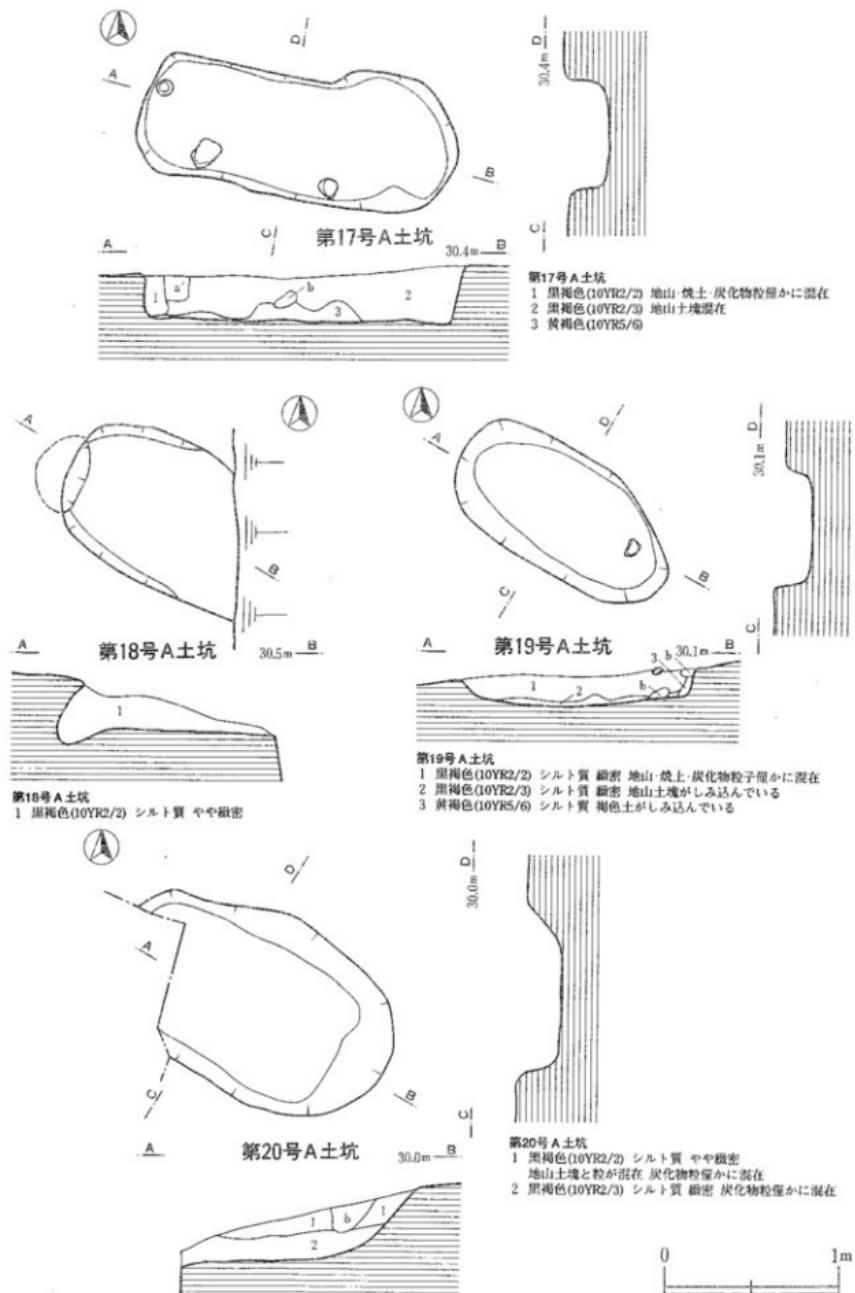
<確認状況> 地山の明黄褐色土層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。東側が電柱工事で削平されていた。

<平面形・規模> 小判形を呈する。長軸は東西にあり、最大幅は1.38m前後で、南北の幅は1.08mである。

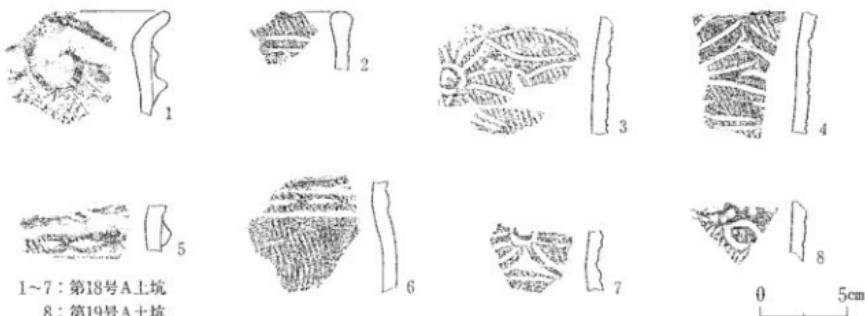
<堆積土> 黒褐色土が上下2層に分けられる。上位には地山土塊が混在していた。

<側面> 底辺の境がはっきりしており、南北側は傾斜して外に開いている。<底面> 平坦である。

<遺構内出土遺物> 遺物は出土していない。



第18図 第17~20号A土坑



第19図 第18・19号A土坑出土遺物

M50グリッド周辺にB土坑・C土坑がまとまっており、平面図を一括掲載し、内容をそれぞれ説明した。

第1号B土坑(SK10)(第20・21図)

<位置>M49グリッドの北東隅にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>2つの楕円形の穴が重なり合った状態にあった。東側が長径0.43m、短径0.29mである。

東側が7cm程深く掘り込まれ段差がある。中にまとまった礫が置かれていた。

<堆積土>東側には暗褐色土が一様に充填していた。

<側面>底面との境ははっきりしないが、中位より外に傾斜して開いている。<底面>長軸線に沿ってやや窪んでいる。<遺物の出土状況>埋土上位で中期の土器と斜行縄文が施された土器破片数点が出土した。

第2号B土坑(SK11)(第20・21図 図版10)

<位置>M50グリッド杭から2mほど西にある。第14号A土坑のすぐ東隣りに位置している。

<確認状況>地山の明暗褐色土を精査して、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>楕円形を呈する。長軸は東西にあり、東西の最大幅は0.9m、南北の幅は0.48mである。

<堆積土>上位から下位にかけて黒褐色土が、底面には暗褐色土が充填していた。

<側面>底面との境は丸みをもち、中位より垂直に立ち上がる。北側の確認面からの深さは30cmである。

<底面>長軸線にそってやや窪んでいる。<遺物の出土状況>埋土上位で斜行縄文が施された摩滅した土器片1点と凹石1点が出土した。

第3号B土坑(SK13)(第20・21図 図版11)

<位置>M50グリッド杭のすぐ西側にある。

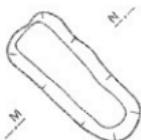
<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、焼土が浮いていた部分を残し、周辺を精査して確認した。

<平面形・規模>不整な楕円形を呈する。東西に長軸をもち、1m前後の幅があったもので、南北の最大幅は0.7mである。

<堆積土>焼土の範囲は長径0.76mの楕円形を呈しており、厚さ10cm前後で上面を覆い、その下に黒褐色土が入り、底面に接した状態で石が検出された。

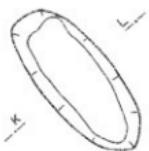
<側面>底辺との境ははっきりしない。外に開いている。確認面からの深さは東で8cm、西で16cmである。

+ 50
N

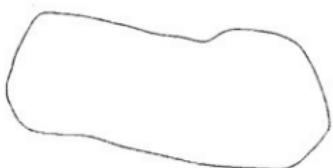


第5号B土坑

+ 50
M

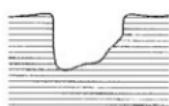


第4号B土坑

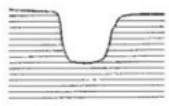


第17号A土坑

-K 30.3m L-



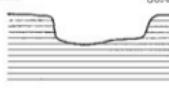
-M 30.4m N-



-E 30.4m F-

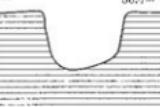


-A 30.4m B-



第2号B土坑

-C 30.4m D-



第1号C土坑 30.4m

第3号B土坑



第1号C土坑

第1号B土坑

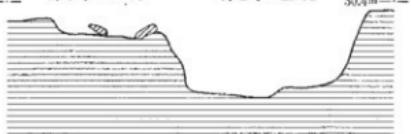
第3号B土坑



第3号B土坑

- 1 單赤褐色(5YR3/4) シルト質 やや緻密 焼土粒密に混在
- 2 單褐色(7.5YR3/3) シルト質 やや緻密 烧土粒僅かに混在
- 3 黒褐色(10YR2/3) シルト質 やや緻密 烧土粒僅かに混在
- 4 黑褐色(10YR2/3) シルト質 やや緻密 地山土壤混在 灰化物僅かに混在
- 5 單褐色(10YR3/4) シルト質 やや緻密 地山土壤混在 灰化物僅かに混在
- 6 單褐色(10YR3/3) シルト質 やや緻密 地山土壤混在 灰化物僅かに混在
- 7 單褐色(10YR3/3) シルト質 やや緻密 地山土壤混在

第3号B土坑



第20図 第1～5号B土坑・第1号C土坑

<底面>石が残り凹凸がある。<遺物の出土状況>埋土下層に土器の口縁部破片がまとまって出土した。大木10式の範疇にはいる。火熱を受け赤変している。

第4号B土坑(SK16)(第20図)

<位置>M50グリッドの西側に位置している。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>長い楕円形を呈する。東西に長軸があり、最大幅は1.06m、南北の幅は0.42mである。

<堆積土>底面に沿って地山土塊が浮いているが、黒褐色土が一様に覆う。

<側面>底辺の境ははっきりしない。傾斜して外に開いている。東側で確認面からの深さは30cmである。

<底面>ほぼ平坦である。<遺物出土状況>遺物は出土しなかった。

第5号B土坑(SK17)(第20図)

<位置>M51グリッド杭から1.5m程離れた西側にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>細長い小判形を呈している。長軸は東西にあり最大幅1.08mで、南北の幅は0.45mである。

<堆積土>底面に沿って地山土塊が浮いているが、黒褐色土が一様に覆う。

<側面>底辺との境ははっきりしている。わずかに外に開いている。東側で確認面からの深さは25cmである。

<底面>中央が窪んでいる。<遺物の出土状況>確認面と同じ高さの埋土上位に羽状繩文の土器破片などが4点出土した。

第1号C土坑(SK14)(第20図 図版11)

<位置>M50グリッド杭の下にあたる。

<確認状況>地山面の明黄褐色土層面を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>ほぼ円形を呈しており、最大幅は1.1mである。

<堆積土>底面の一部には暗褐色土が堆積しているが、上位から底面までの大部分を黒褐色土が覆う。

<側面>底辺との境ははっきりしない。壁の立ち上がりは一部は垂直で他は斜めである。

<底面>凹凸がある。<遺物出土状況>遺物は出土しなかった。

第1号袋状土坑 (SK09)

<位置>L49グリッドの南西隅にある。

<確認状況>地山の明黄褐色土層面を精査し、黒褐色土の落ち込みとして確認した。

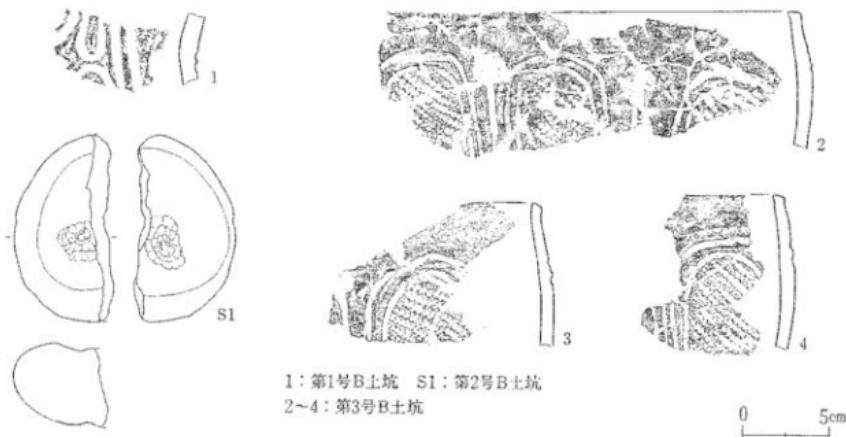
<平面形・規模>開口部は円形で、中心円状に底部が広がる。開口部と底辺部の差は0.2m前後である。

<堆積土>大きく3層に分かれれる。下位より中位にかけて地山土塊が混在した褐色土と暗褐色土が厚く堆積し、上位には黒褐色土が充填していた。中位までは比較的短い時間で埋没していくものとみられる。

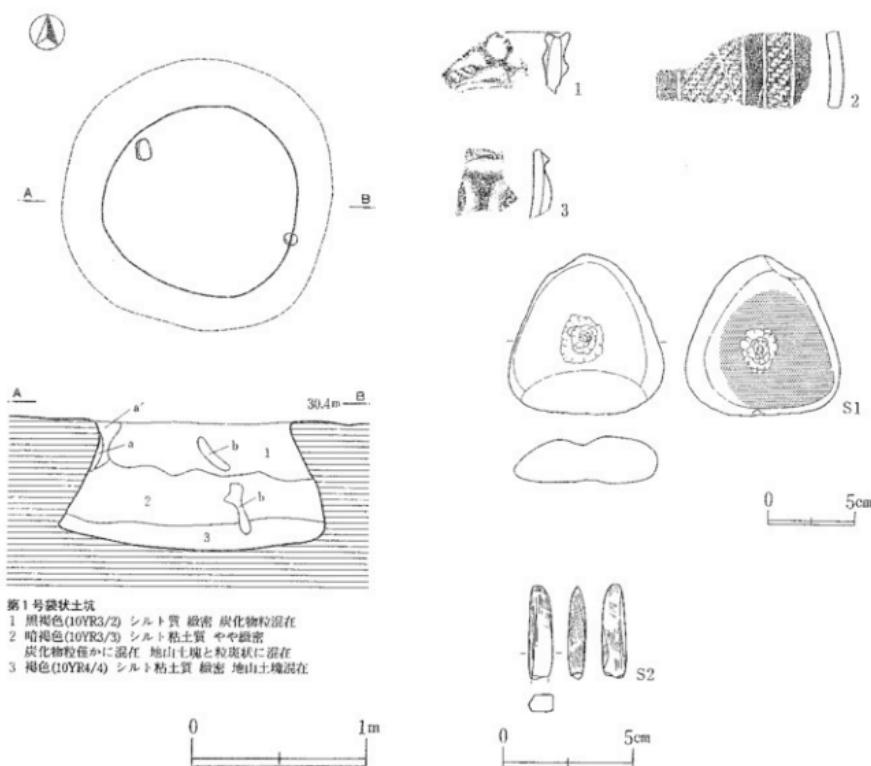
<側面>底面との境ははっきりしている。底辺より60度前後の角度で内傾していく。

<底面>中央がやや窪んでいる。

<遺物出土状況>上位から中位にかけて土器破片と石器素材の小剥片が出土した。中位の土器破片は大木9式であり、また最下層からは大木10式の土器片が出土した。閃石と磨製石斧が底面から浮いて出土している。



第21図 第1～3号B土坑出土遺物



第22図 第1号袋状土坑と出土遺物

3 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構(SR01)(第23・24図 図版12)

<位置・確認状況> N46グリッド杭の50cm東側にある。第1号竪穴住居跡の埋上中にある。

<埋設状況> 底部を下にしていたが、幾分傾いた状態である。黒褐色土を掘り込んでいるが、掘り方は判然としない。

<土器の法量> 底部の直径が10cmで、口縁部はない。胴部上半の最大径は30cmである。

<土器内部の状況> 黒褐色土が充填していたが、中からの出土遺物はない。

第2号土器埋設遺構(SR04)(第23・24図 図版12)

<位置・確認状況> M51グリッドの北西側にある。表土の黒褐色土を掘り下げていく途中で確認した。

<埋設状況> 底部を下にしていた。地山の黄褐色土を15cm前後掘り込んでいるが、底部は掘り込みよりわずかに浮いている。

<土器の法量> 底部の直径が10cmで、口縁部はないが、胴部の最大径が25cmで大きく開く。

<土器内部の状況> 黒褐色土が充填していたが、中からの出土遺物はない。

第3号土器埋設遺構(SR05)(第23・24図 図版12)

<位置・確認状況> P48グリッドの南東側にある。表土の黒褐色土を掘り下げていく途中で確認した。

<埋設状況> 底部を下にして正置した状態であった。地山の明黄褐色土を掘り込んでおり、掘り方は土器より一回り大きい。

<土器の法量> 底部の直径が9.5cmで、口縁部はない。なお土器が脆く復元ができなかった。

<土器内部の状況> 黑褐色土が充填していたが、中からの出土遺物はない。

4 火床・焼土遺構

第1号火床(火床1)(第5図)

<位置> L49グリッドの東側にある。

<確認状況> 地山の明黄褐色土層を精査して確認した。

<平面形・規模> 長軸方向は東西にあり、最大径0.5mである。

<特徴> 赤変の度合いは薄く、上面が削平されたと見られる。

第2号火床(火床2)(第5図)

<位置> L49グリッドの南にある。

<確認状況> 地山の明黄褐色土層を精査して確認した。

<平面形・規模> 長軸方向は東西にあり、最大径0.4mである。

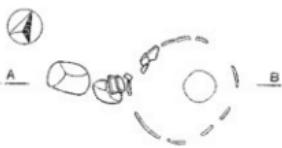
<特徴> 赤変の度合いは薄く、上面は削平されたものと見られる。平坦面にあることと第1号火床と周辺のピットとの関連から住居跡の可能性を追ったが確かめられなかった。

第1号焼土遺構(SN29)(第23図)

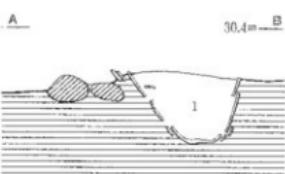
<位置>L52グリッドのほぼ中央にある。

<確認状況>地山の明褐色土層を精査して確認した。

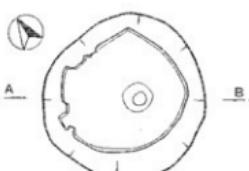
<特徴>焼土を中心とする径0.9mの不整円形の浅い掘り込みがあり、北側には深鉢形土器が正位に埋設されていた。土器埋設部と掘り込み部からなる炉と判断し、周辺で住居穴等の確認作業を行ったが、検出できなかった。埋設土器は胴部下半から底部を残すだけで、被熱により脆くなってしまっており復元できなかった。詳しい時期も不明である。



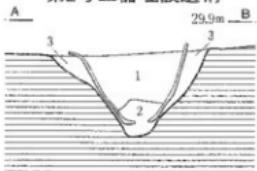
第1号土器埋設遺構



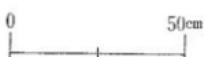
第1号土器埋設遺構
1 黒褐色(10YR2/3) シルト質 やや緻密



第2号土器埋設遺構



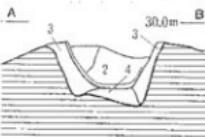
第2号土器埋設遺構
1 黒色(10YR2/1)+黒褐色(10YR2/2) シルト質 やや緻密
炭化物粒 地山上粒僅かに混在
2 黑褐色(10YR2/3) シルト質 やや緻密
地山土壤が斑状に混在
3 暗褐色(10YR3/4) シルト質 やや緻密
地山土粒僅かに混在



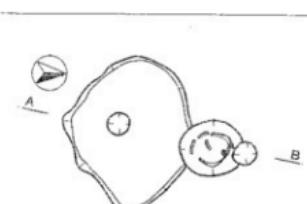
第23図 第1～3号土器埋設遺構・第1号焼土遺構



第3号土器埋設遺構



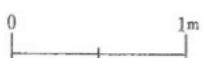
第3号土器埋設遺構
1 黒褐色(10YR2/3) シルト質 やや緻密
地山土粒と炭化物粒僅かに混在
2 黑褐色(10YR2/2) シルト質 やや緻密
3 暗褐色(10YR3/4) シルト質 やや緻密
地山土粒と炭化物粒僅かに混在
4 暗褐色(10YR3/4) シルト質 細密 地山土粒混在

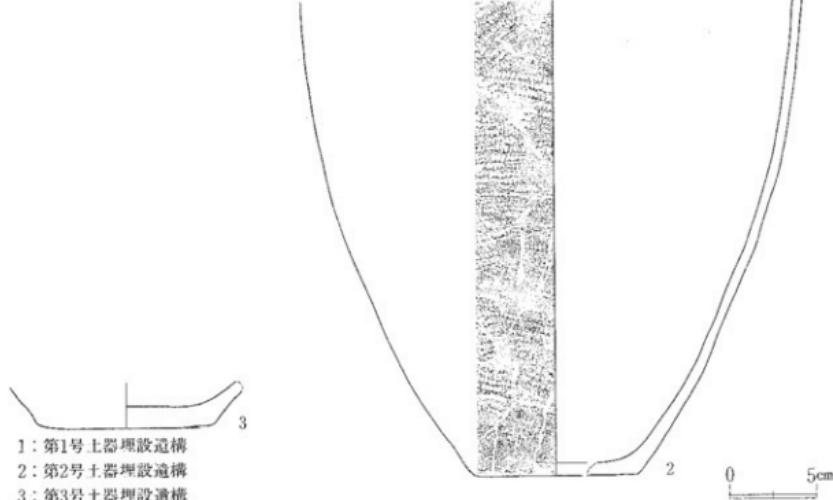
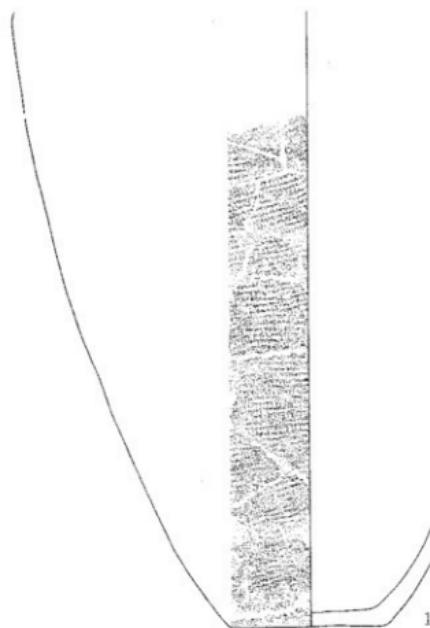


第1号焼土遺構



第1号焼土遺構
1 黒褐色(10YR2/2) シルト質 やや緻密 地山土粒僅かに混在
2 暗褐色(10YR3/4) シルト質 細密 地山土塊混在
2' 2のベースに燒土粒混在
3 黑褐色(10YR2/2) シルト質 やや緻密 烧土粒と炭化物粒僅かに混在
4 赤褐色(2.5YR4/8) シルト質 やや緻密 粒状で炭化物粒混在
5 赤褐色(5YR4/8) シルト質 やや緻密 炭化物粒僅かに混在





第24図 第1～3号土器埋設遺構出土遺物

5 出土遺物と土層の状態から中世以降と思われる遺構をまとめた。

第2号C土坑(SK19)(第25図 図版13)

<位置>O46グリッド杭の直下にあり、第1号堅穴住居跡の南側の壁に接している。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>円形を呈しており、直径1.33mである。

<堆積土>底面に接して軟らかい暗褐色土が盛り上がる。下位から上位にかけては地山土塊が多く混在した黒褐色土が厚く堆積しており、掘り上げた土を埋め込んだものと見られた。

<側面>底辺との境は丸みをもっており、開口部に向けて斜めに開く。肩の段は意識的に掘られたものとみられる。なお確認面から最も深いところは76cmである。

<底面>中央が窪んでおり、底面の直径は1.1mである。

<遺物出土状況>埋土に斜行縄文が施された土器破片が数点入っており、底面下位に銅錢が点在して出土した。

第1号方形土坑(SK03)(第25図 図版14)

<位置>M47グリッドの北側に位置している。

<確認状況>地山の明黄褐色土層を精査し、黒色土の落ち込みとして確認した。

<平面形・規模>方形に近い掘り込みであり、東西の辺の中央に短く張り出す突出部がある。掘り込みの東西幅が1.15m、南北幅が1.3mである。

<堆積土>黒褐色土が充填していたが、底面付近では3cmほどの炭化物があり、さらに焼土粒子の混在も目立っていた。

<側面>底辺との境ははっきりしており、底辺から垂直に立ち上がる。側面の上部が焼け赤変していた。

<突出部>幅25~30cmで、長さ25~35cmであり、傾斜して外に開いている。

<底面>ほぼ平坦である。

<遺物出土状況>埋土上位から中位にかけて斜行縄文が施されているが、摩滅した上器破片が出土した。

第1号火葬墓(SK33)(第25図 図版13)

<位置>K50グリッドの北西隅にある。

<確認状況>東西に長い溝状の耕作による搅乱を掘り下げている途中で、炭と灰のまとまりとして確認した。

<平面形・規模>プランははっきりしない。最大幅は0.53mである。

<堆積土>黒色土が覆っていた。

<側面>底辺との境ははっきりしており、傾斜して外に開いている。

<底面>緩い凹凸がある。

<遺物出土状況>炭の間に微少な骨片が混在していた。

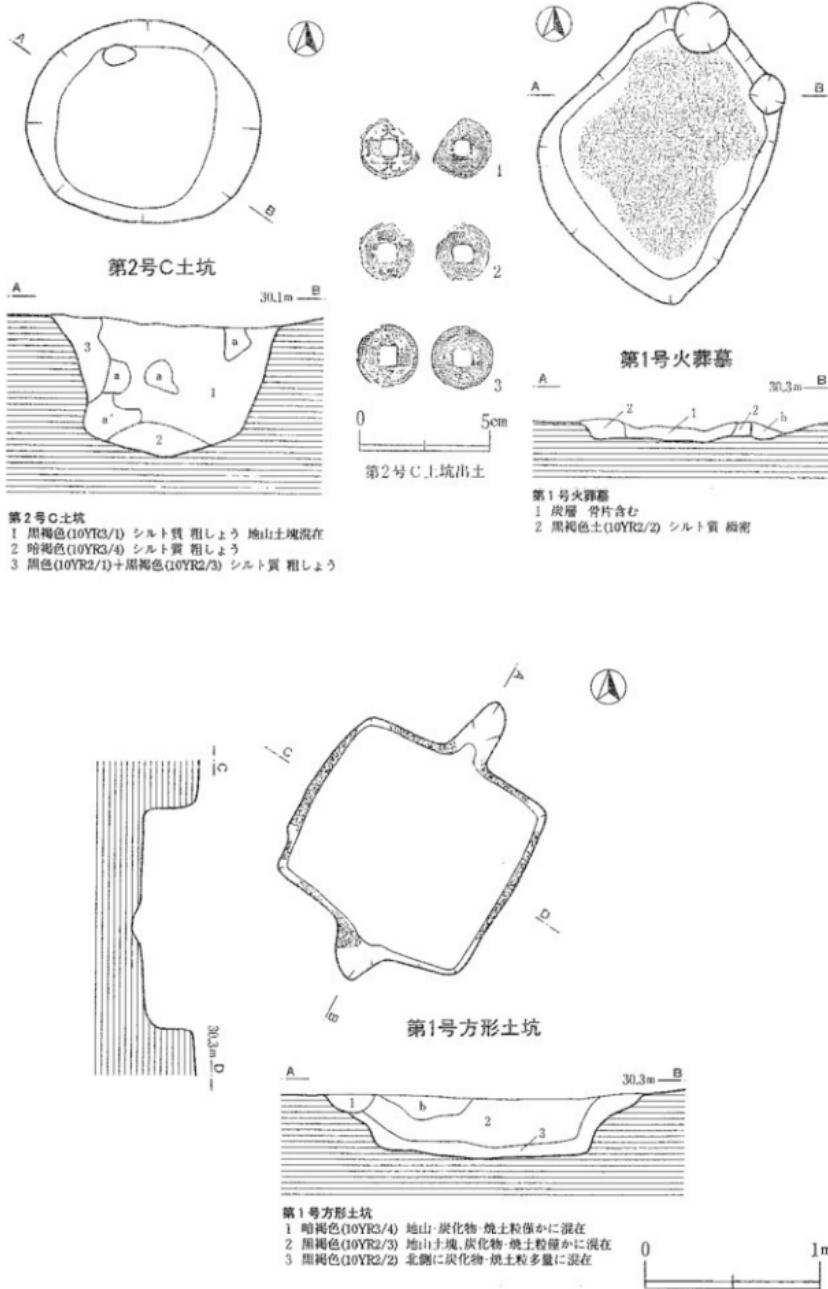
第1号長方形土坑(SK42)(第26図)

<位置>L51グリッドの北西隅にある。

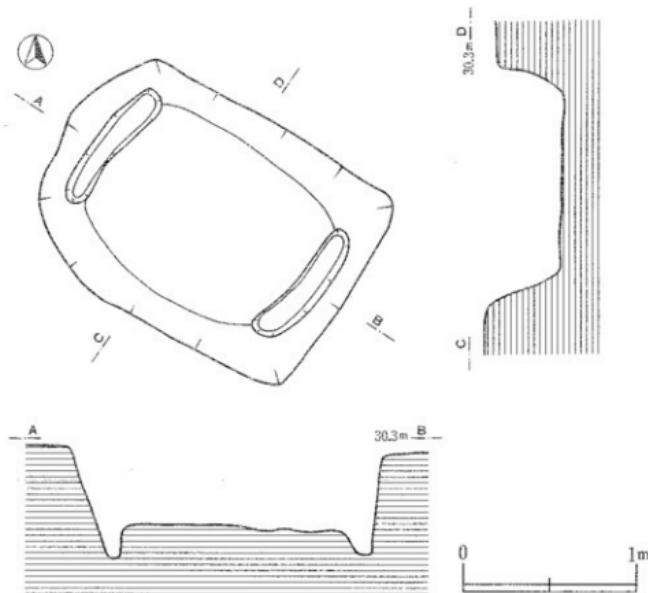
<確認状況>東西に長い溝状の耕作による搅乱を掘り下げている途中に箱形の掘り方であることを確認した。

<平面形・規模>平面形は長方形を呈し、東西の幅は1.35mである。

<堆積土>黒色土のベースに明黄褐色土塊が混在していた。



第25図 第2号C土坑・第1号火葬墓・第1号方形土坑



第26図 第1号長方形土坑

<側面>底辺との境ははっきりしており、四方ともに60度前後の角度で斜めに開いている。

<底面>底面は平坦である。東西の底辺によって幅0.15~0.18mの溝が切られている。

<遺物出土状況>遺物は出土していない。

第1号柱穴(SKP32)(第27図 図版14)

<位置>L50グリッドの南東側に位置している。

<確認状況>耕作による搅乱の溝に接しており、黒色土を除いていくうちに掘り込みであることを確認した。

<平面形・規模>開丸方形を呈し、長径が0.95mである。底面は0.65mで0.3mの差がある。

<堆積土>軟らかい黒色土が一様に充填していた。

<側面>底辺との境ははっきりしている。底辺からほぼ垂直に立ち上がり、中位よりわずかに斜めに開いて開口部に達する。確認面からの深さは1.15mである。

<底面>底面は白色粘土層に達し、平坦である。

<遺物出土状況>遺物は出土していない。

第1号大型土坑(SX03)(第27図 図版15)

<位置>大部分がK53グリッドにかかるが、南側はK52グリッドに、西側はL53グリッドにかかっている。

<確認状況>耕作による搅乱と思われたが、黒色土が深く、掘り下げていって壁・床を確認した。

<平面形・規模>橢円形を呈し、長径が4mである。

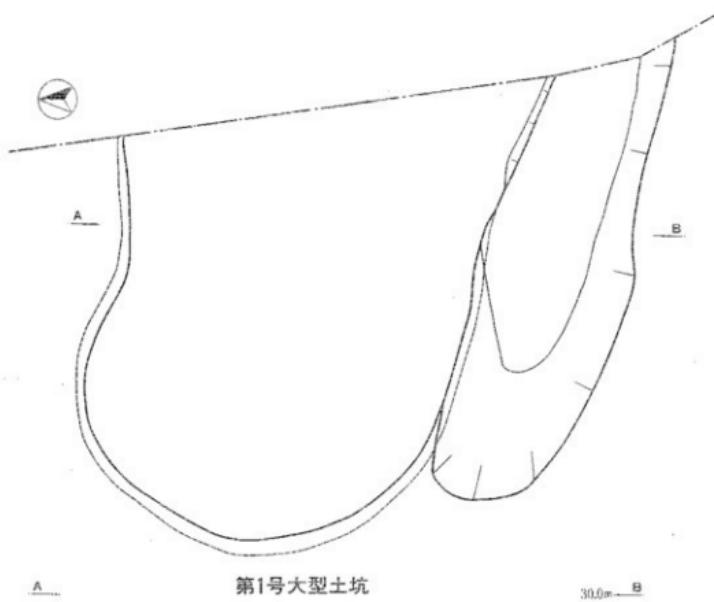
<堆積土>壁の周囲は地山土塊が混在した黒褐色土が、底面には黒色土塊と黒褐色土塊が混在していた。

さらに地山土塊の混在する土が凸レンズ状に堆積しており、端底状の窪みとなつたところでは黒褐色土が充填していた。

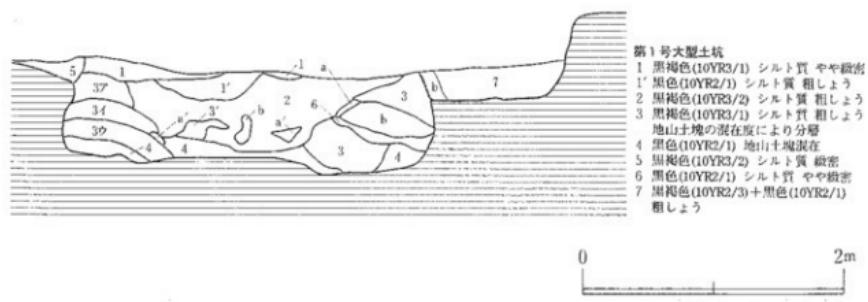
＜側面＞底辺部の境は丸くなっている。底辺から膨らみをもって立ち上がり、中位よりわずかに斜めに開いて開口部に達する。深さは90cmである。

＜底面＞底面は白色粘土層であり、幾分凹凸がある。

＜遺物出土状況＞開口部を取り巻くように遺物が出土した。埋土上位から中位にかけては縄文前期の土器片が、遺構確認面の上位からは縄文中期の土器破片が出土した。



第1号大型土坑



第27図 第1号柱穴・第1号大型土坑

第3節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、縄文時代の土器・石器・石製品があり、他に古代の須恵器がある。これら遺物のほとんどは1層から出土しており、埴地造成時に包含層とともに移動していると考えられる。また出土量では縄文時代中期の土器が最も多く、後期・晚期のものがこれに続く。

1 土器(第28・29図 図版18・19・22)

縄文時代中期前半の土器(1~11・14~19)

1・2は折返口縁部にL原体を継位に押圧し、体部上半には同一原体の短軸絡条体による横位の撫糸文が施される。3では体部上半に短軸絡条体の側面压痕文がある。4・5の折返口縁部は無文で、体部上半には横位のS字状沈線文の上に刻みのある隆帯が貼付される。6~8は内湾する口縁部に数条の隆帯を貼付している。9は外反する口縁には突起が付き、体部中央がわずかに膨らみのある器形である。RL繩文を地文として、口縁から体部上半には刻みのある隆帯が曲線的に貼付される。10はRL繩文を地文として横位に沈線文が描かれ、11はRL繩文を地文に直線的な隆帯と曲線的な隆帯が二本一組で垂下する。11・14~17では体部にLR繩文が付されていて、14は折返口縁部で、口唇部は丸みがあってわずかに内湾する。15は体部上半が膨らみ口縁部は外反するものと思われる。体部にはLR原体が継位回転施文された後、同一原体によって部分的に条が継位に付される。18はR原体の短軸絡条体によって体部に網目状の撫糸文が施される。底部片の19は平坦な底部で、体部中央に向かって直線的に内傾する器形と考えられ、底端部までRI繩文が横位回転施文される。大木7式である。

縄文時代中期後半の土器(20~24・26~36・39~41)

20・21は口縁突起部に渦巻状の隆帯が貼付され、22は波状L縁の頂部から二列一組の四角い刺突列が垂下する。26・27の体部にはLR繩文を地文として二本一組の隆帯が貼付され、26では隆帯の末端が渦を巻いている。23・24・28~36は繩文部を沈線で細い継長の楕円形に区画するもので、28・29ではLR繩文、30・31ではRI繩文、32~36・39・40ではRLR複節繩文である。41は条痕文が継位に施され、外形接合の痕跡が明瞭である。大木8・9式である。

縄文時代後期の土器(13・25・37・38・42~44・48)

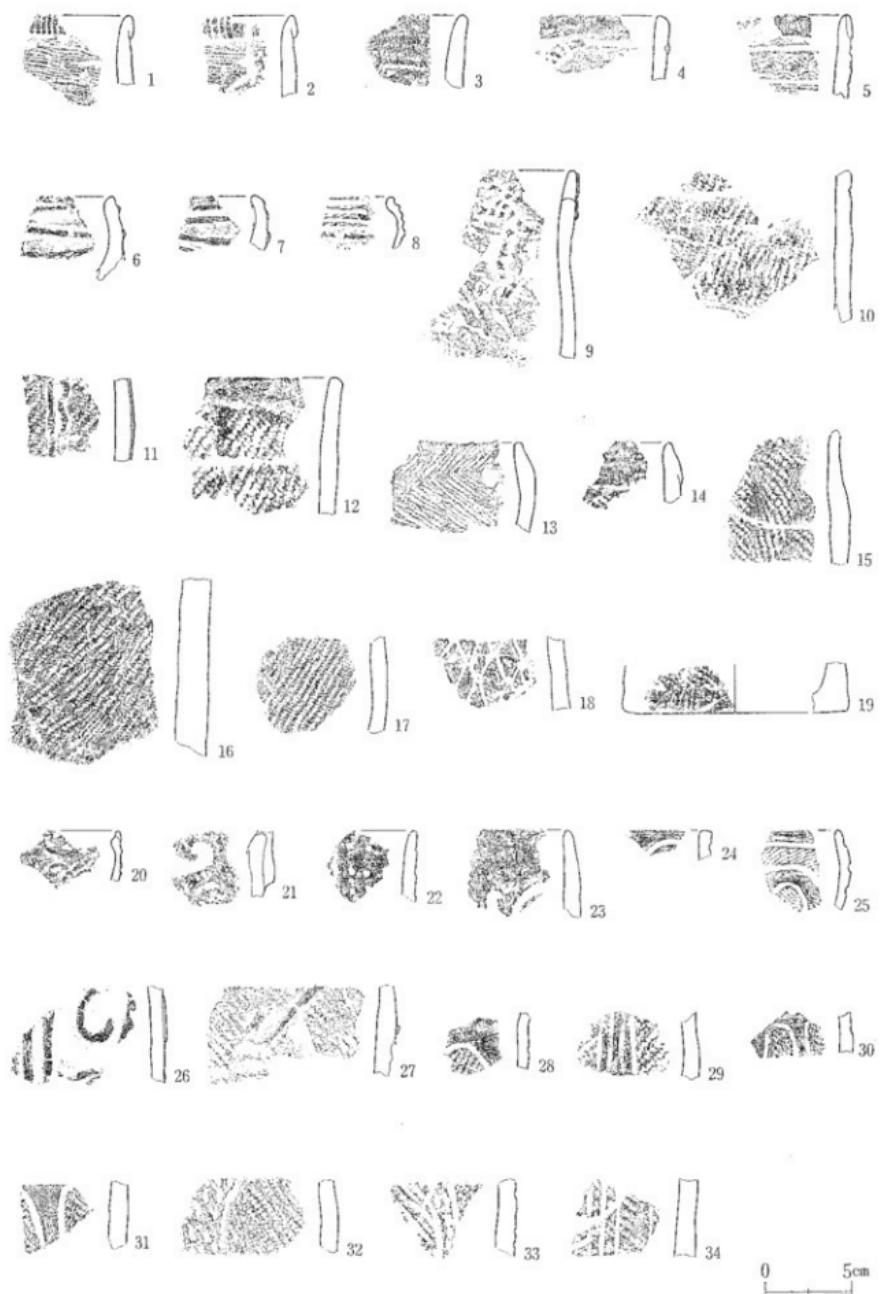
渦巻や入組状の繩文帶が施される上器で、25・37・38では細かなLR繩文で、無文部は丁寧に磨かれ光沢がある。43は壺か注口上器と思われ、体部には円形文が描かれ、頸部は二段に括れる。44は口縁部の直立する深鉢形上器で、口縁には刺突のある円筒状の突起があり、波状口縁を呈する。体部には継位にLR繩文が施された後、二本一組の沈線によって入組状の文様を描く。42の底部は端部がわずかに突出し、底面は高台状となって網代痕跡がある。十腰内III・IV群に並行する土器である。

縄文時代晚期の土器(45~47・49~51)

45・47の浅鉢、46の注口上器は口縁部が小波状を呈し、体部には浮彫的な雲形文が描かれるものと考えられる。49~51は深鉢形土器でいずれもLR繩文が付され、51では体部上端に狭い文様帶があり、刻みによる小波状を呈する口縁部下に二条の沈線が引かれる。大洞C1式である。

古代の土器(52~53)

52は内外面に叩き目のある壺の体部破片で、53は回転糸切底の壺と考えられる。



第28図 遺構外出土土器(1)

第29圖 遺構外出土土器(2)



2 石器(第30~34図 図版20~22)

遺構外出土の石器には、石鎌・石槍・石籠・石錐・石匙・スクレイパー・石斧・石鍤・石皿・砥石がある。このうち砥石を除けば縄文時代の石器である。このほか剥片や細片があり、一部は黒褐色土下位と地山直上から出土したことから、旧石器の可能性も考えて、発掘段階から整理過程で留意したが、明瞭な石器もなく旧石器とは判断しがたかった。

石鎌(S1~S16)

石鎌は基部の形態からⅠ類：無茎鎌、Ⅱ類：有茎鎌と三分類し、さらに基部の形態から細分した。

Ⅰa類(S1・S2)：基部が平坦で、S1は両面調整され平坦剥離は鎌身中央まで達している。S2では両面の中央部に先行剥離面を残し、二次調整の剥離は短い。

Ⅰb類(S3~S9)：凸基式である。S3~S7の基部の抉りは浅くわずかに湾曲する程度だが、S8・S9では抉りが深い。いずれも両面調整で、断面はレンズ状を呈する。

Ⅱa類(S10~S12)：凹基式である。S12は先端部を欠損している。

Ⅱb類(S13~S16)：鎌身と基部が明瞭でなく、S13・S15のように棒状のものと、木の葉形のS14がある。S16は未製品である。

石槍(S17~S19)

いずれも槍身中央付近で折損している。両面とも広い剥離調整が行われるが、S18では先端部の片面に細かな調整が施される。

石籠(S20~S32)

最も多い器種で、刃部の特徴から3分類した。

Ⅰ類(S20~S23)：剥片の一端に設けられる刃部の調整は背面側に粗い剥離で、急角度の刃部を作出する。素材剥片はS22を除くと横型で、主要剥離面には縁辺部のみに二次調整が施される。刃部角度は49°~63°である。

Ⅱ類(S24~S28)：刃部調整の剥離はⅠ類よりも浅く、刃部角度も小さい。素材剥片はS24・S27は縦型、その他は横型で、主要剥離面の二次調整は縁辺部に施される。刃部角度は52°~61°である。

Ⅲ類(S29~S32)：刃部は、幅が狭く深い平坦剥離で作出され、刃部角度は極めて小さい。S29は横型剥片を素材とし、主要剥離面の打面側の縁辺に二次調整が行われる。S30~S32には両面調整が施される。刃部角度は39°~49°である。

石錐(S33)

縦型剥片の両側辺に浅い剥離の二次調整を施し、両面の先行剥離面を広く残す。先端部は摩滅している。

石匙(S34~S40)

S34~S38は縦型剥片を素材とする縦型の石匙で、S39は横型の石匙である。二次調整は背面を中心に施され、S34では二次調整の平坦剥離が深いが、その他は背面にも先行剥離面を広く残す。主要剥離面にはS34・S35では片側縁にだけ細かな浅い剥離が行われるが、他はつまみ部のみに二次調整が施される。S40は鉄石英で、主要剥離面中央に先行剥離面を残すだけで、全体に細かな調整が繰り返される。

スクレイパー(S41~S51)

石籠に次いで多い器種である。素材剥片における刃部の位置によって三分類した。

Ⅰ類(S41~S46)：縦型剥片素材の、打面とは反対方向の一端あるいは両端に急角度の刃部を設けている。

主要剥離面には二次調整は全く行われず、背面の刃部調整は浅い剥離によって行われ、刃部幅は狭い。刃部角度は49°～69°である。

II類(S47～S51)：縦型剥片の片側縁あるいは両側縁に刃部を作出している。刃部の調整はI類と同様に浅い剥離を連続するが、刃部角度は小さい。刃部角度は33°～42°である。

打製石斧(S52)

緑色凝灰岩を素材とするもので、加工途中の未製品と考えられる。片側縁と素材疊の長軸両端に加工が行なわれている。

石錘(S53～S56)

楕円形や長方形の疊の長軸ないしは短軸の両端を打ち欠いたもので、素材は扁平な凝灰岩を用いている。S53～S54の重さはそれぞれ182.5 g・70.9 g・86.4 gである。

石皿(S57)

厚みのある板状の安山岩の一面を利用している。使用面はわずかに中央に向かって傾斜し、滑らかである。中央付近には斜め方向の短い溝がある。

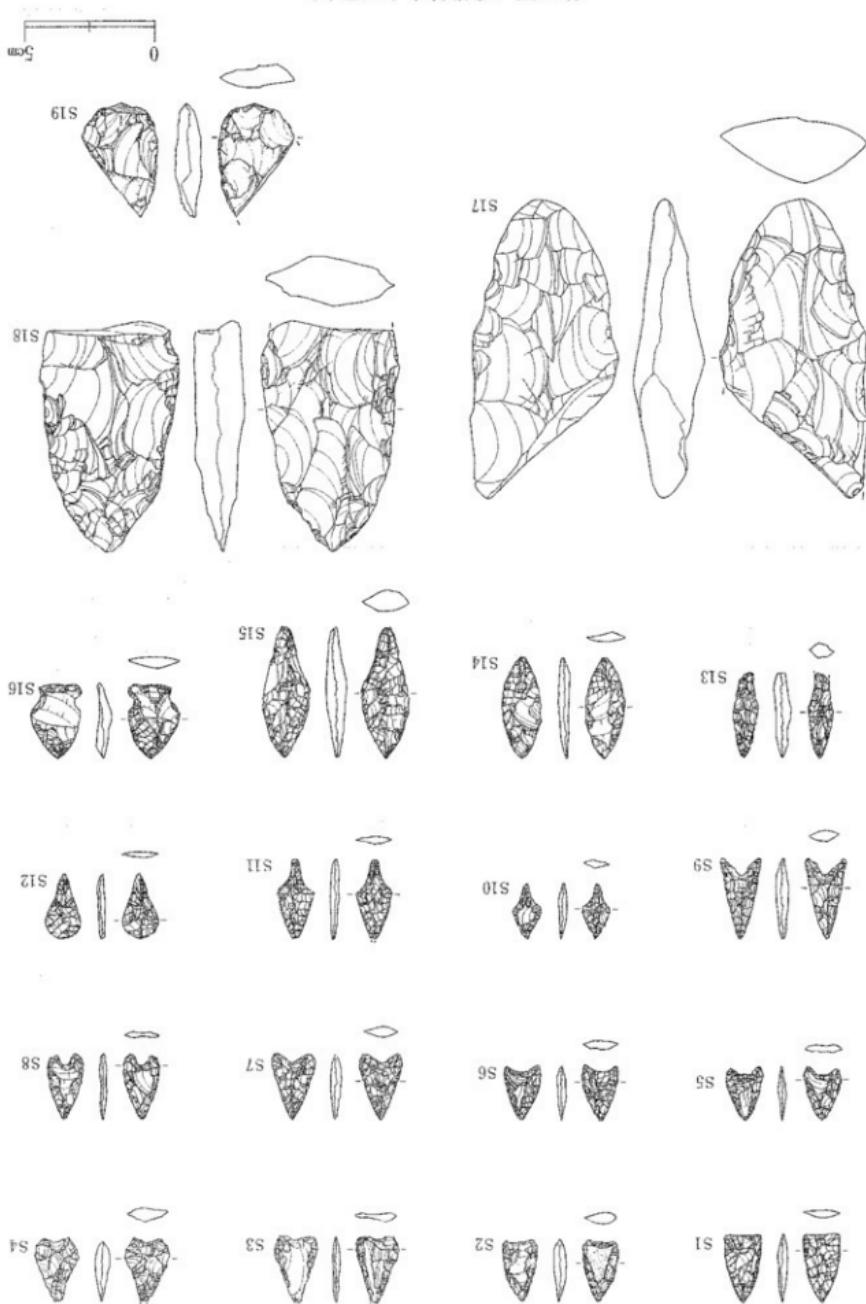
砥石(S58～S60)

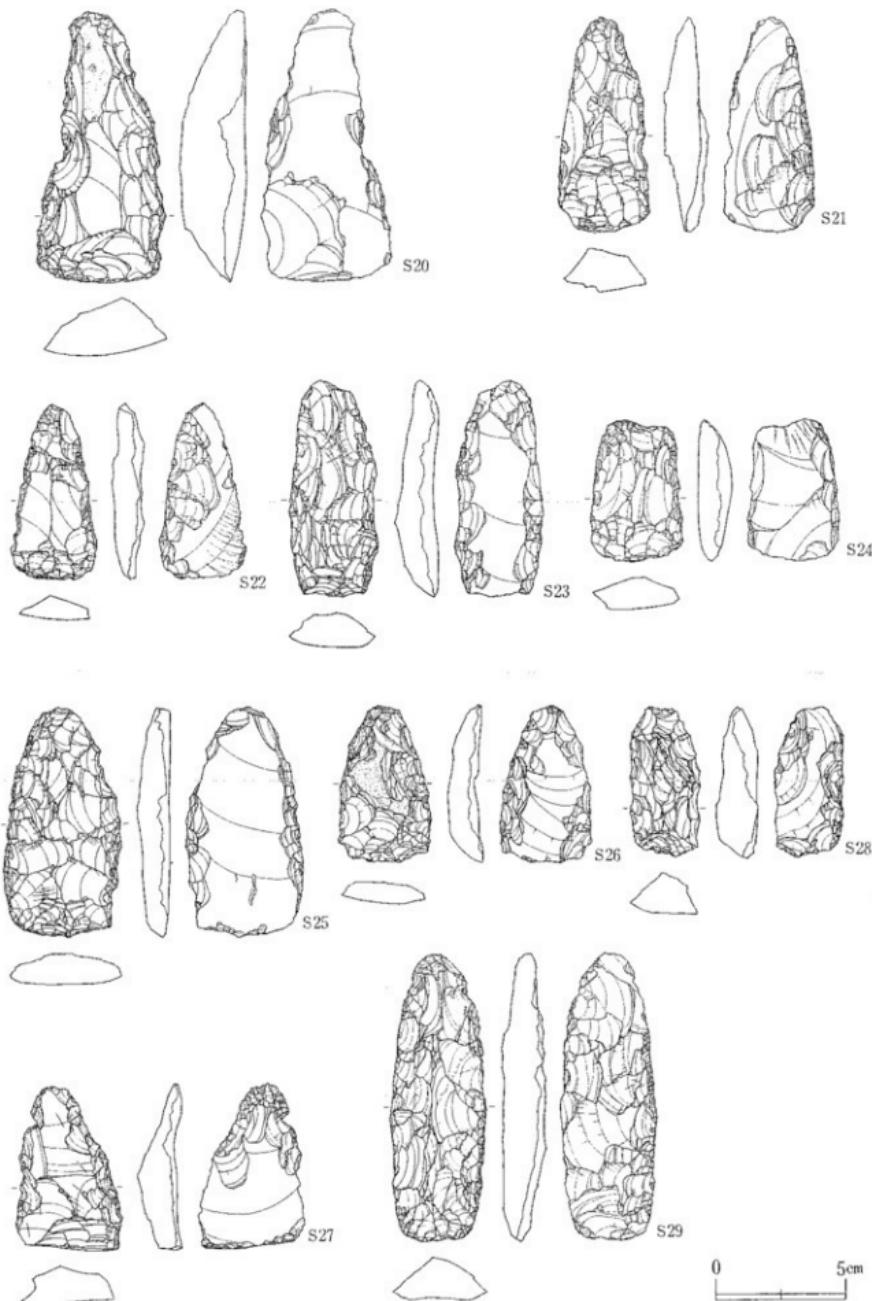
3点とも使用面を一面残すだけで、全体の形状は不明である。擦痕は斜め方向に走る。石質も不明である。

3 石製品(第34図S61)

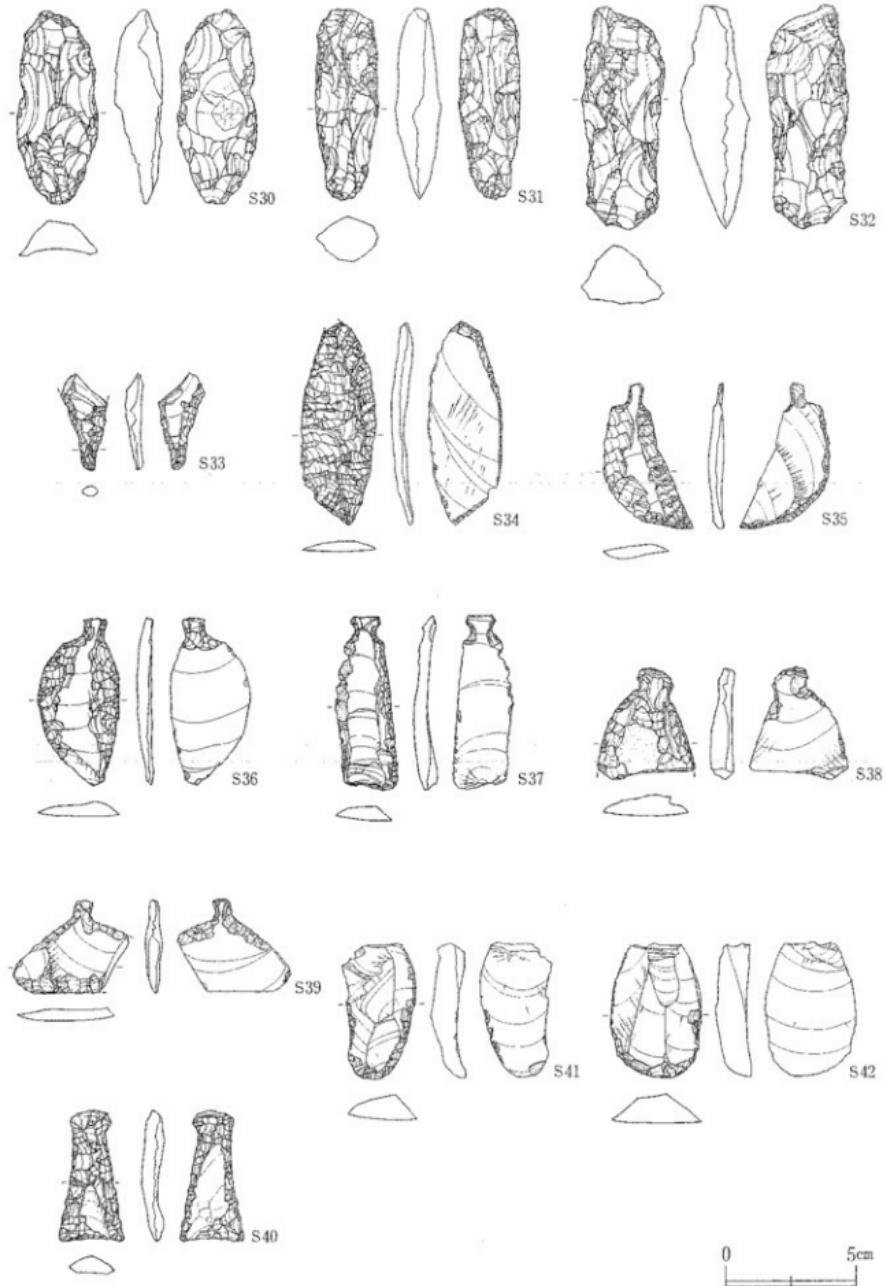
緑色の凝灰岩を素材としている。端部が丸い長方形に成形したものと思われ、全面に研磨痕跡である擦痕が顕著である。端部の両面にはほぼ同位置に盲孔があり、その下が一度括れる。この括れは下端にも見られ、その位置で折れている。片面の中央には中軸に沿うように数条の線刻がある。

第30図 漢陽外出土石器(1)

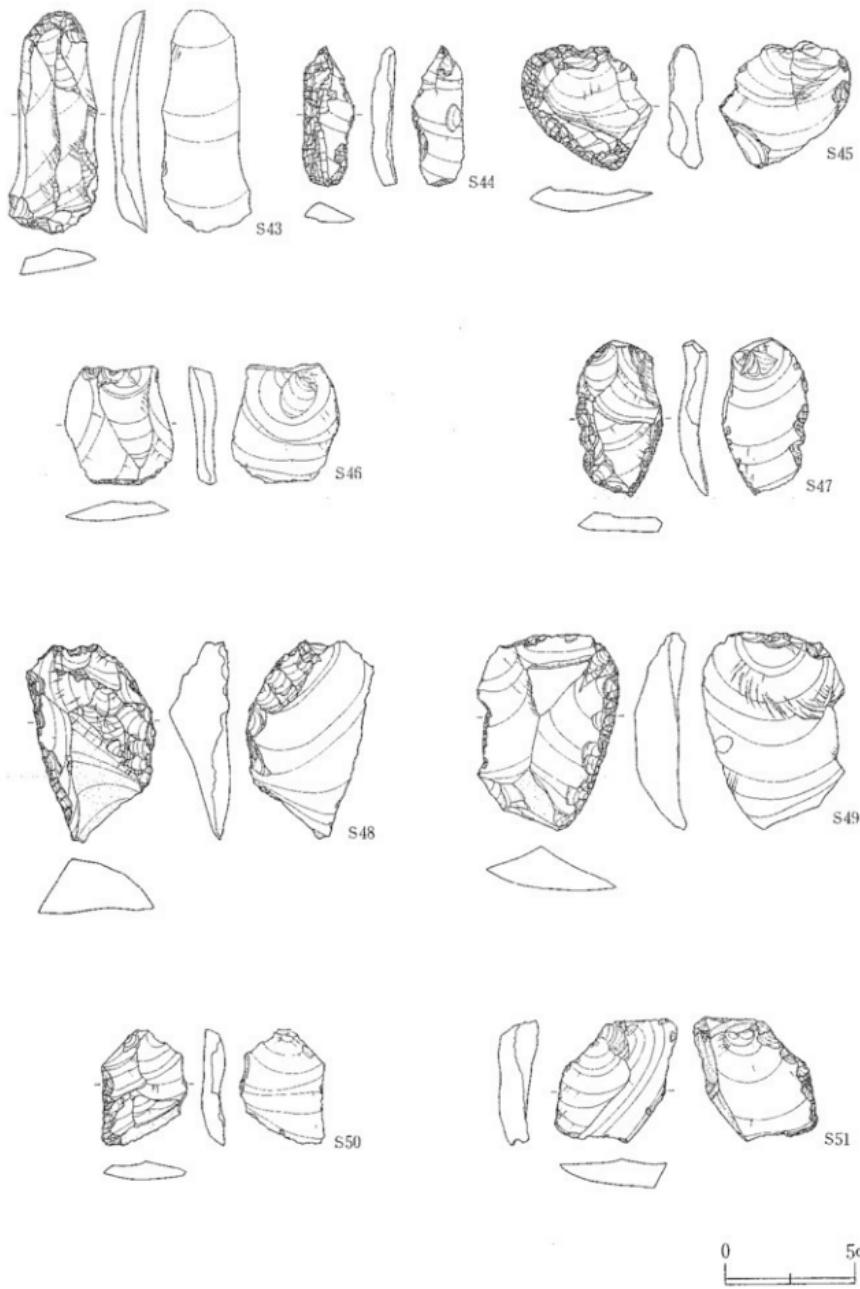




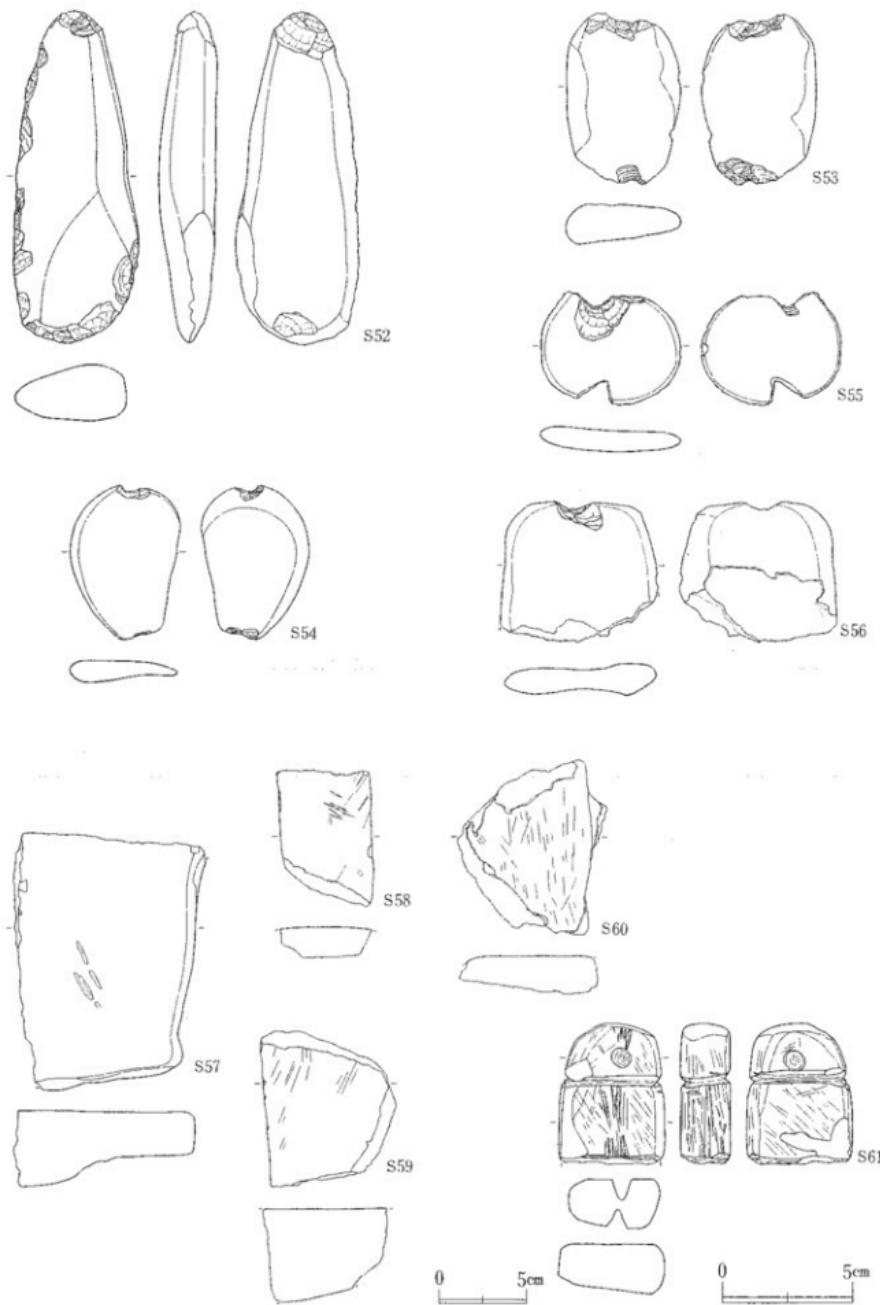
第31図 遺構外出土石器(2)



第32図 遺構外出土石器(3)



第33図 遺構外出土石器(4)



第34図 遺構外出土石器(5)・石製品(1)

第5章 まとめ

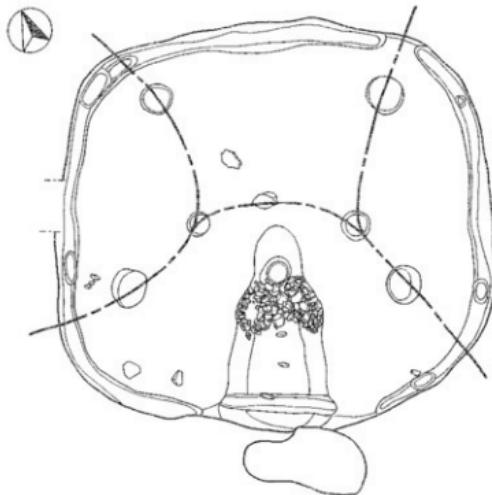
南に張り出した細長い丘の上に形成された遺跡であり、地形的な制約をうけてはいるが、多くの遺構が確認された。出土遺物と遺構配置からみて、少なくとも三時期に対応したものであると推定された。したがってここでは各遺構の特徴をとらえ、構築された時期を中心に検討した結果について考察し、まとめとした。

1 縄文時代中期後半の竪穴住居跡と土坑

2軒検出した竪穴住居跡については、竪穴の内部から大木10式上器が出土していること、土器埋設部・石組部・掘り込み部からなる複式炉を持つ構造的な特徴から縄文時代中期後半の時期に属すると考えた。それぞれを比較すると平面形・規模・炉の形態・柱の配置・掘り込みの深さなどに違いがみられ、出土土器にも時期差があり、第2号竪穴住居跡が第1号竪穴住居跡より古いと考えた。

ところで第1号竪穴住居跡の写真撮影を行った際に、北側から炉を中心にして構図を設定したところ、南側の延長線上に鳥海山の頂上がくっきりと見えた。この情景から推察して第1号竪穴住居跡の構築に際しては、占地の特殊性を意識したものではないか、それが第2号A・B竪穴住居跡と構造的に際だった違いをしめしているのではないかと考えた。こうした意識は縄文時代中期後半の集落遺跡における、炉を広場の中心方向に向けて構築していることに通じるものがあるとも読みとれる。

また第1号竪穴住居跡の構造についてみると、空間の利用についても配慮がされている。炉を中心として左右対称に主柱が配置され、中間に間仕切り用と思われる支柱、北東側に周溝が切れる部分が入り口とみなされる。柱の配置でくくると均等な空間の区分がみられることから特殊な住居として、意識的に構築された可能性が高いといえる。模式的に空間をくくってみたのが下の図である。なお第1号袋状土坑については、土坑の形態の特徴と出土遺物から、さらに第2号竪穴住居跡の中軸線上にあることから同時期に存在したも



第35図 第1号竪穴住居跡平面区分模式

のと考えた。

2 繩文時代晚期の土坑墓と上器埋設遺構

第1表はA土坑の遺構の規模・方向などについて、まとめたものである。3基のA土坑に赤色顔料の散布がみられたこと、形態・方向性に共通したものがあることから、縄文中期の土器が埋土中から多量に出土している第17・18号A土坑を除いた他のA土坑については土坑墓と考えた。時期については、出土遺物が少なく、周辺の出土土器から後期・晚期に構築された可能性を推定したが、その形態的な特徴と斜面に縄文時代晚期の粗製土器を埋設した上器埋設遺構が見つかっていることと関連させて、縄文時代晚期の遺構と考えた。

A土坑については、南側と西斜面にまとまる群があり、高位面の肩部に配置している点に特徴がある。意識的に高い面をさけていることから、高位面が儀式の場として機能していた可能性もある。これまでの県内の調査では、晚期の墓域を集落と別の区域に設定した例が多くみられ、雄物川を挟んだ対面の台地先端に縄文時代晚期の遺跡が多いことから、寄騎館遺跡との関連が推測される。

遺構名	調査番号	グリッド	長経(cm)	短経(cm)	長軸方位	備考
第1号A土坑	SK20	M・N44・45	174	100	N-46°-W	赤色顔料
第2号A土坑	SK21	M・N45	166	86	N-61°-W	赤色顔料
第3号A土坑	SK22	M・N44・45	162	100	N-63°-W	
第4号A土坑	SK23	M45	(48)	(88)	N-23°-W	
第5号A土坑	SK24	L・M44	(118)	80	N-61°-W	
第6号A土坑	SK25	M45	134	78	N-29°-W	
第7号A土坑	SK26	L45	120	70	N-62°-W	
第8号A土坑	SK36	N47	152	84	N-82°-W	赤色顔料
第9号A土坑	SK04	N・O48・49	166	114	N-52°-W	
第10号A土坑	SK05	N49	174	88	N-48°-W	
第11号A土坑	SK06	N49	136	80	N-55°-W	
第12号A土坑	SK07	M・N49	156	82	N-56°-W	
第13号A土坑	SK08	M・N49	152	90	N-54°-W	
第14号A土坑	SK12	M・N50・50	168	82	N-50°-W	
第15号A土坑	SK18	N50	154	64	N-39°-W	
第16号A土坑	SK28	M50・51	162	70	N-49°-W	
第17号A土坑	SK15	L・M50	184	82	N-77°-W	
第18号A土坑	SK31	K49	(108)	84	N-63°-W	
第19号A土坑	SK27	L52	138	70	N-56°-W	
第20号A土坑	SK35	L53	(138)	108	N-61°-W	

第1表 A土坑一覧

3 中世以降の遺構について

はっきりした中世の遺構としては錢貨が出土した土坑墓がある。上記遺構の埋土とは、土色・性質の違いがはっきりした黒色土が堆積しており、黒色土が堆積した遺構については、比較的新しい時期の遺構である可能性を考えた。

推定が先に立つが、炭が多量に入り、壁が焼けた土坑状態で検出された方形土坑は火葬施設と考えられ、炭と骨が混在して検出された火葬墓と関連付けて考えられた。

参考文献

協和町教育委員会『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』1977(昭和52)年

秋田県教育委員会『内村遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第82集 1981(昭和56)年

秋田県教育委員会『上能ノ沢遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第213集 1991(平成3)年

秋田県埋蔵文化財センター『平成3年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告書資料一虫内Ⅰ遺跡一』1992(平成4)年

秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V-山王岱遺跡-』1992(平成4)年



斜面部調査状況（東→西）



平坦部の調査状況（南→北）



調査後の状況（西→東）



調査後の状況（北→南）



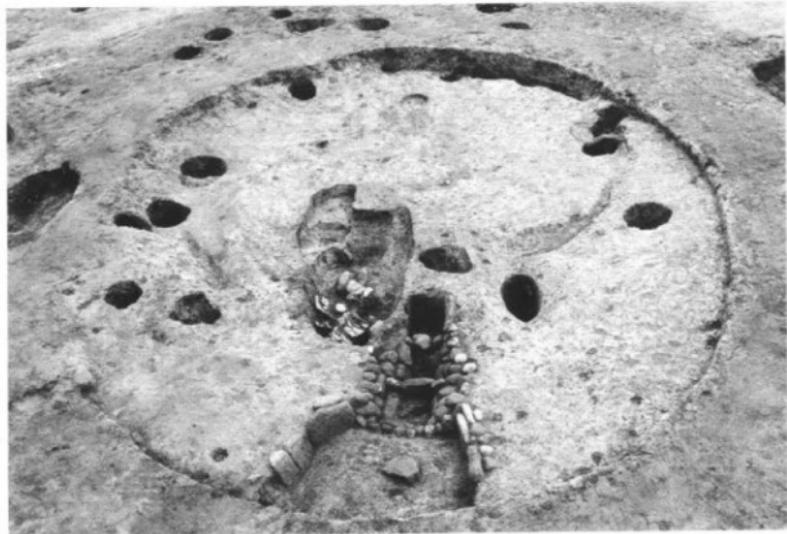
第1号竪穴住居跡完掘状況(北→南)



第1号竪穴住居跡の炉(西→東)



第1号竪穴住居跡の炉(南→北)



第2号A・B竪穴住居跡(北→南)



第2号A・B竪穴住居跡の入り口(東→西)



第2号A・B竪穴住居跡の入り口(南→北)



中央土坑群確認状況（東→西）

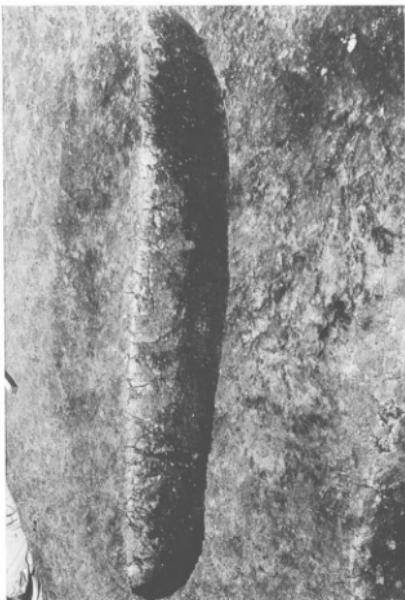


中央土坑群完掘状況（東→西）

第13号 A 士坑断面(南→北)

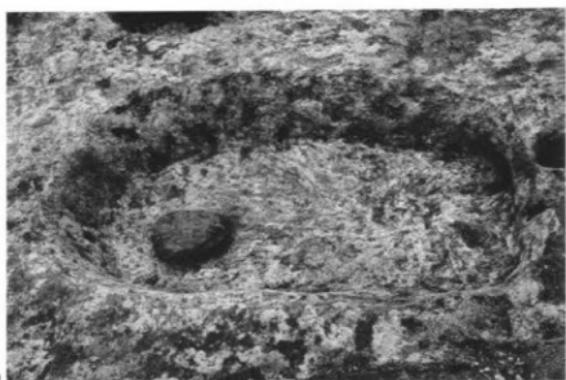


第2号 A 土坑断面(南→北)



南侧土坑群完掘状况(东→西)





第1号A土坑完掘状况(南→北)



第2号A土坑完掘状况(南→北)



第3·4号A土坑完掘状况(南→北)

第11号 A 士坑完掘状况 (南→北)

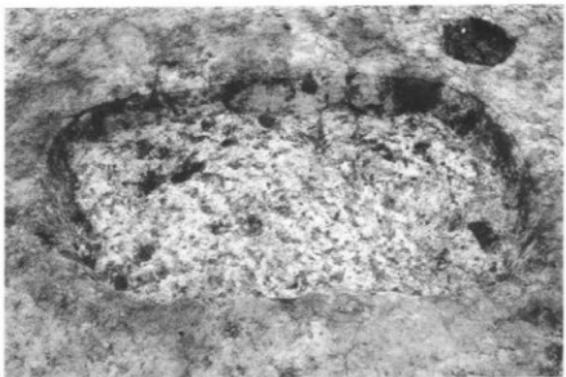


第10号 A 士坑完掘状况 (南→北)

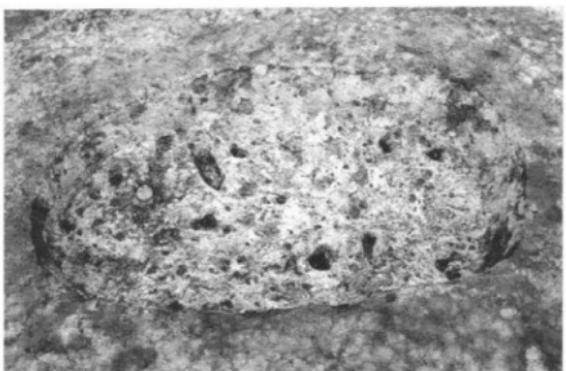


第8号 A 士坑完掘状况 (北→南)

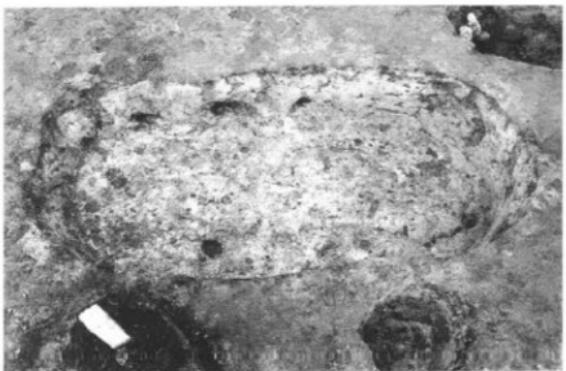




第12号 A 土坑完掘状况 (南→北)



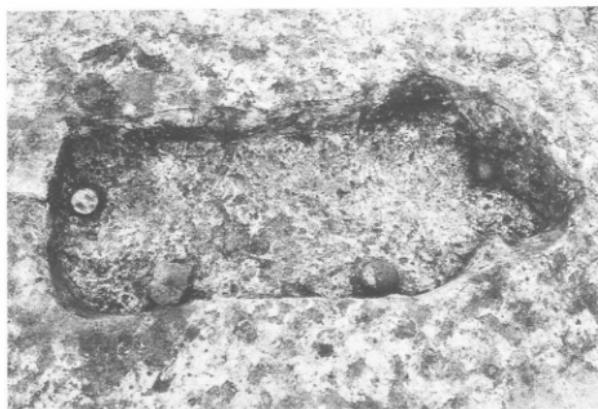
第13号 A 土坑完掘状况 (南→北)



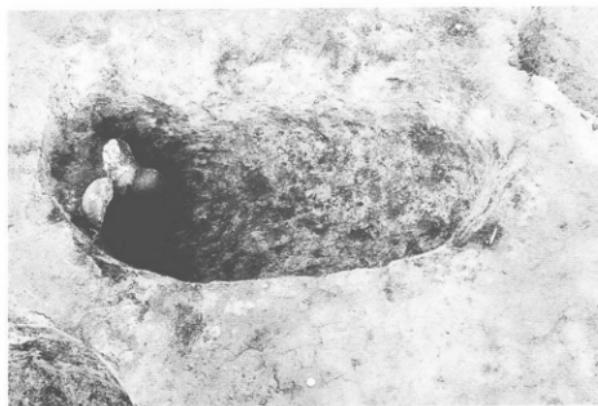
第14号 A 土坑完掘状况 (南→北)



第16号 A 土坑完掘状況 (北→南)



第17号 A 土坑完掘状況 (南→北)



第2号 B 土坑完掘状況 (南→北)

第3号B土坑完掘状况(真上)



第1号C土坑完掘状况(東→西)



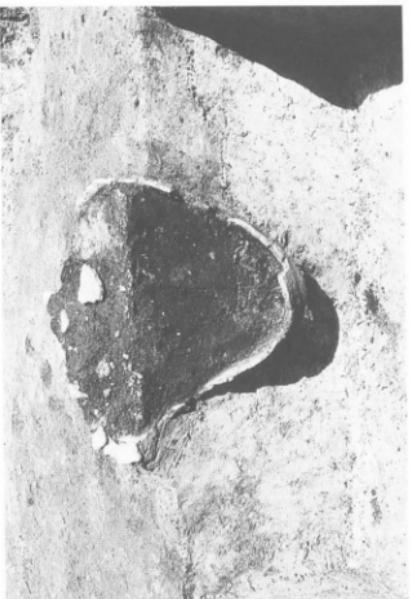
第1号袋狀土坑完掘状况(西→東)



第3号土器埋設遺構(南→北)



第2号土器埋設遺構(南→北)



第1号土器埋設遺構(南→北)





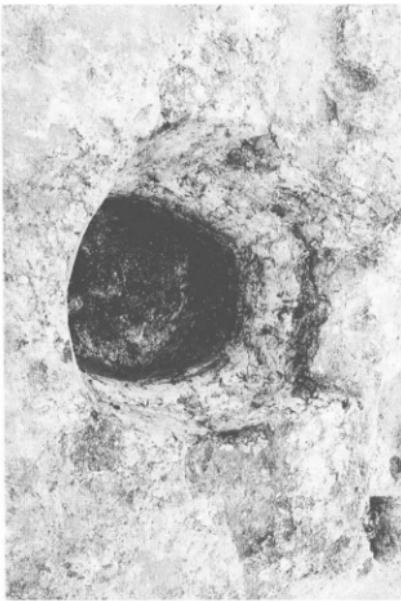
第2号C土坑上层断面(南→北)



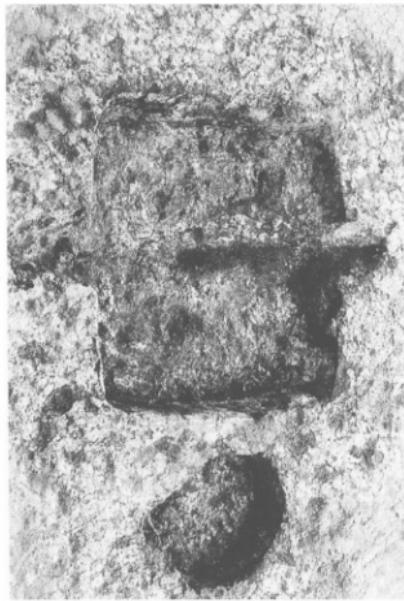
第2号C土坑完掘状况(南→北)



第1号火葬坑(南→北)



第1号方形土坑完掘状况(南→北)



第1号方形土坑完掘状况(北→南)



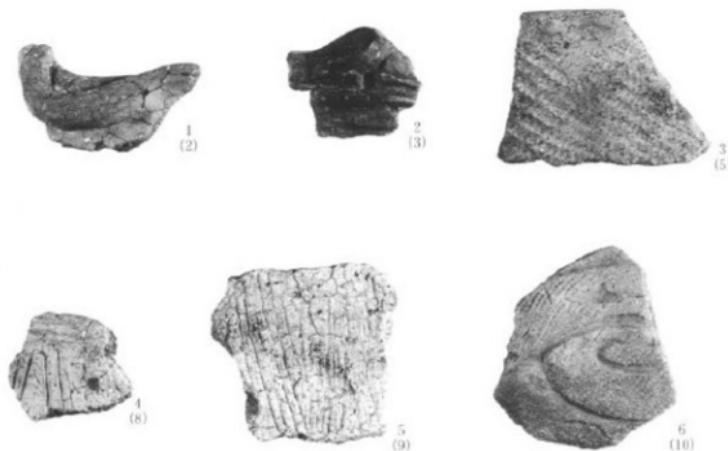
第1号方形土坑完掘状况(西→东)



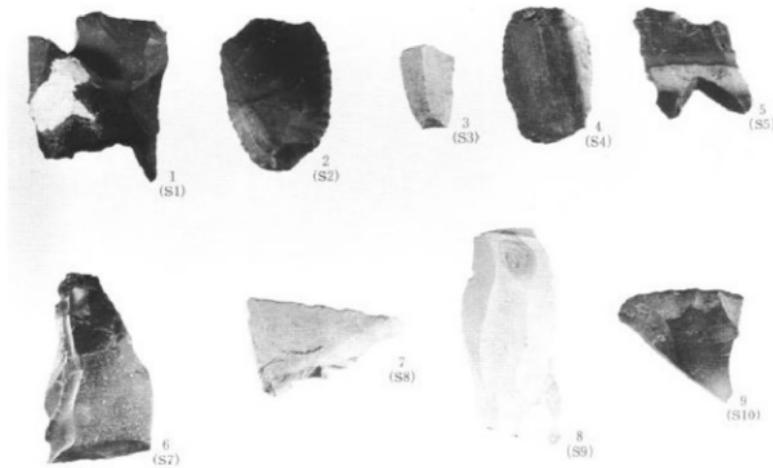
第1号大型土坑の調査風景（南→北）



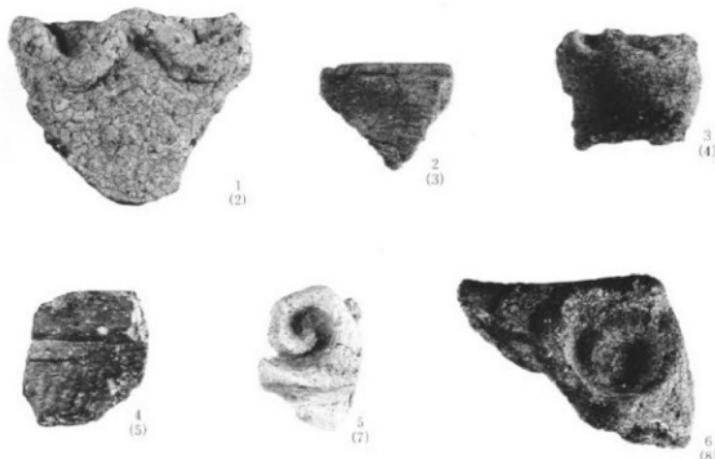
第1号大型土坑完掘状況（南→北）



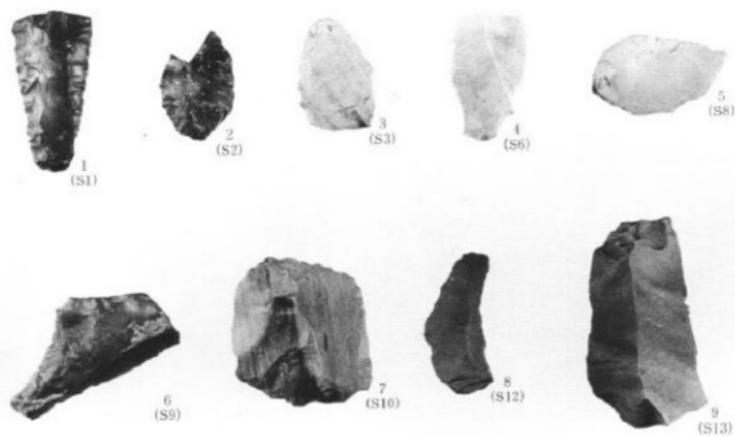
第1号竖穴住居跡出土遺物(1)



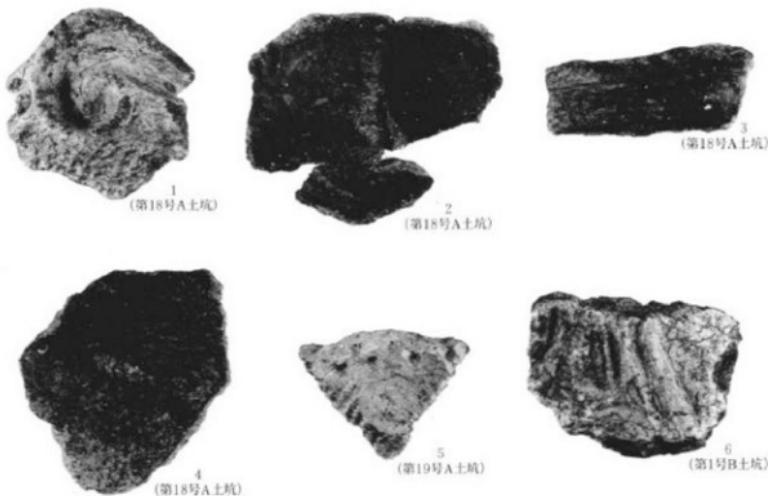
第1号竖穴住居跡出土遺物(2)



第2号A·B竪穴住居跡出土遺物(1)



第2号A·B竪穴住居跡出土遺物(2)



土坑出土遺物



第2号A·B竪穴住居跡出土遺物(3)

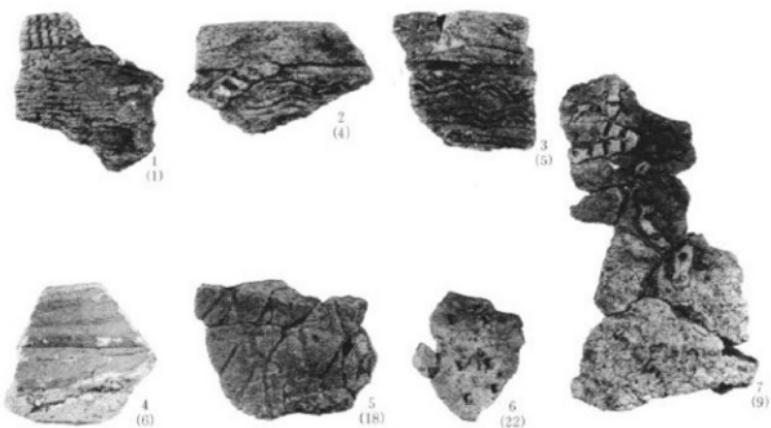
第13号A土坑出土遺物



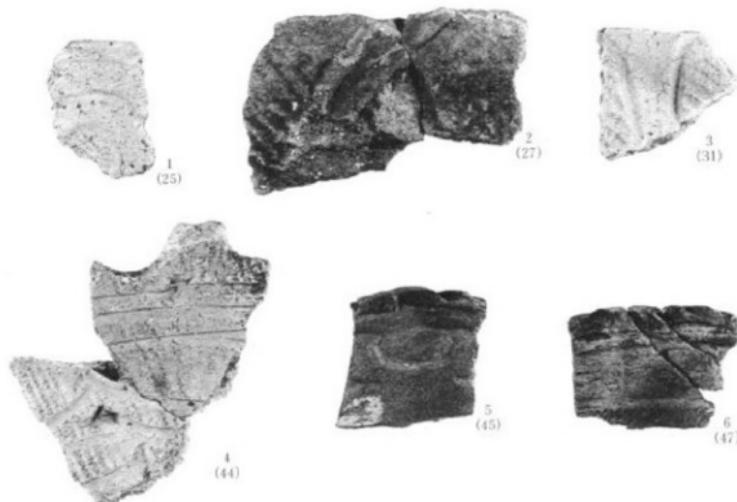
第1号土器埋設遺構出土遺物



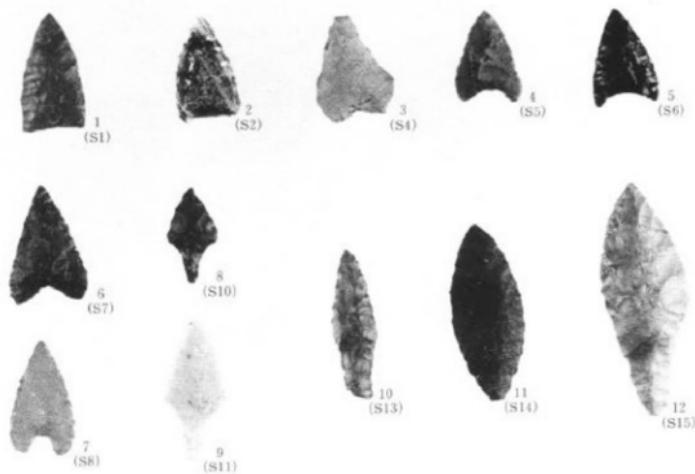
第2号土器埋設遺構出土遺物



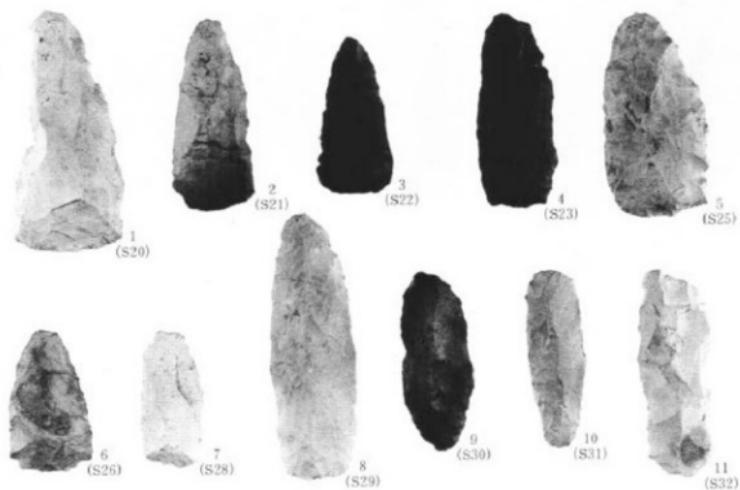
遺構外出土土器(1)



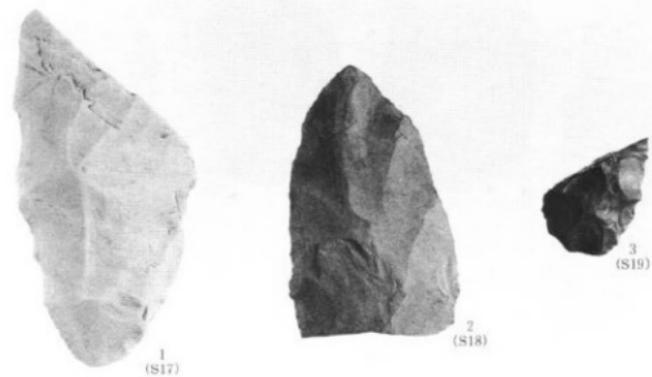
遺構外出土土器 (2)



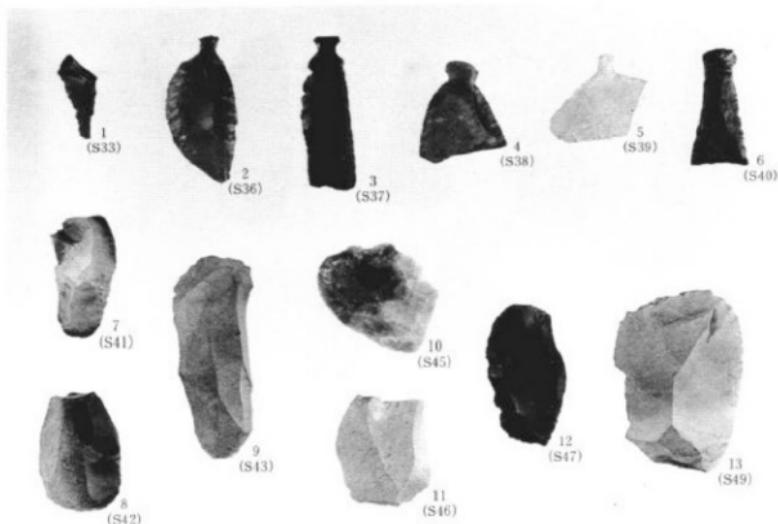
遺構外出土石器 (1)



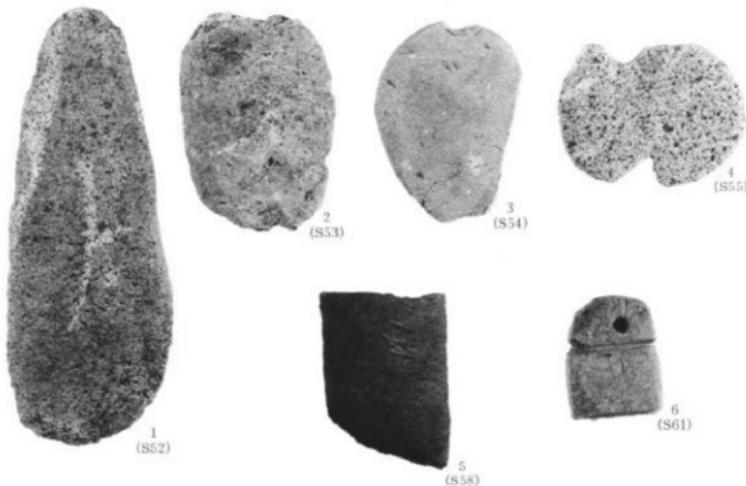
遺構外出土石器(2)



遺構外出土石器(3)



遺構外出土石器(4)



遺構外出土石器(5)・石製品

報告書抄録

ふりがな	よりきだていせき						
書名	寄騎館遺跡						
副書名	一般国道13号刈和野バイパス改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第277集						
編著者名	庄内昭男・高橋忠彦						
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター						
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331						
発行年月日	西暦1998年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
よりきだていせき 寄騎館遺跡	あきたけんせんばくぐん 秋田県仙北郡 さかわまちぬのよしかわ 協和町峰吉川 あさあしげわどむり 字芦沢通40	市町村 53427	遺跡番号 一	39度 33分 13秒	140度 21分 58秒	19960819 19960921	1,350 国道13号 改築事業 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
寄騎館遺跡	集落	縄文時代 中期	竪穴住居跡 2軒 袋状土坑 1基	縄文土器・石器 (石鎌・石匙・石範など) 須恵器			
	墓域	縄文時代 晩期	土坑墓 20基 土坑 7基				
	墓域	中世	土坑墓 2基 火葬墓 1基				